



明治
39 7 21
内交

著者の認諾なくして
劇に上すを許さず

序

(1)

怨

脚本「怨」は原名をアドリエヌ、ルクーヴロールと云ひ、
佛國翰林院大學士にして泰西有数の作劇家なるユジエーヌ、
スクリーブ氏の作に係り、其當時の事實談を脚色した悲劇で
ある。十八世紀の頃、佛國にルクーヴロールといふ女優があ
つたが、彼女は絶世の美人で、且つ女優の泰斗として一時歐
州の梨園を震動せしめた。然るに彼女は、サクソン王國の國
王を戀ひ慕うて、王が亡命中に少なからず其窮乏を救ひ、さ
ましく心を盡したが、同じくサクソン國王に夙より思ひを
寄せてゐた佛國の一貴夫人が彼女の王を慕ふを見て、嫉妬の
念に堪へず、遂に悪計を繰らして、嘗て彼女よりサクソン國

(2)

怨

王に贈つた花束に激烈なる毒薬を盛つて、それを王の名によつて彼女に贈り返した。彼女は之を受けて非常に王の薄情を怨み、其花束に接吻すると忽ち毒薬が効を奏して彼女は其場に斃れて仕舞つたといふ。

其悲惨なる物語を、スクリーン氏が靈筆を駆つて、凄婉な脚本に綴つたのが即ち此「怨」である。

爾來泰西の劇壇は之を悲劇中の傑作として之れを迎へ、今に至るまで、佛國の劇場は絶えず開演して、大喝采を博してゐる。

予が此名作を翻譯したのは、今から數年前のことであるが、亡友尾崎紅葉氏が存命中、之を見て深く感激し、予の翻譯し

たものに更に潤色を加へられて、茲に大なる光彩を添へた。予は今回之れを『祖國』及び『匕首』と共に三大悲劇として公にし、萎微振はざる我が劇界に勸めて、幾分か貢献する所あらんことを期するものである。

怨

(3)

明治三十九年六月

長田 秋濤

登場人名

武揚公爵

森巢伯爵(實ハサクソンの王)

僧(武揚公爵侍従)

三曾根老人(樂屋番)

侯

甲

乙客 人

丙

武揚公爵夫人

阿鳥江嬢

阿網夫人

垂尾嬢

穂畦嬢

團珠井嬢

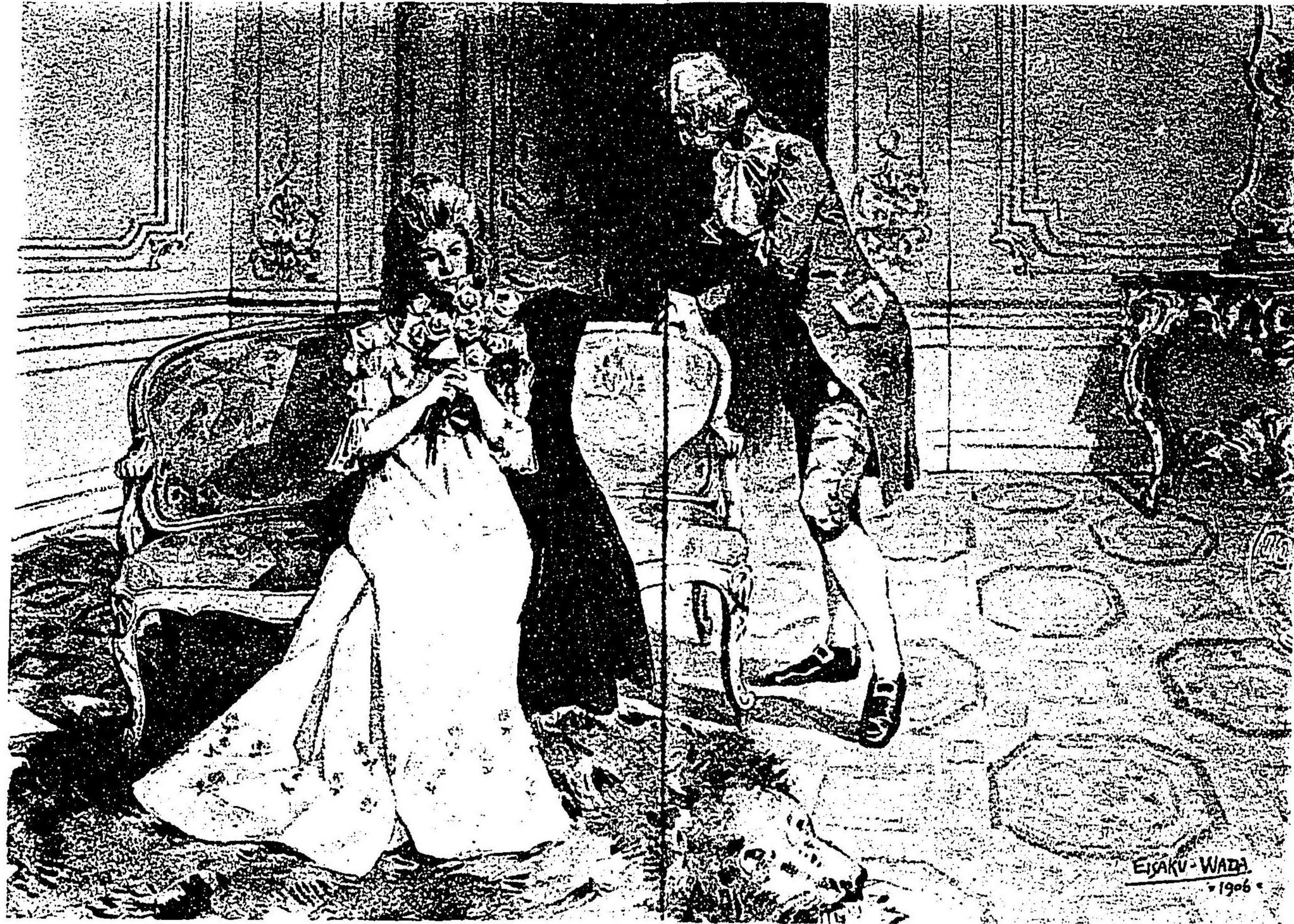
紀節嬢

佛國翰林院文學大博士作劇家

ユジエーヌ、スクリーア作

原名 アドリエンヌ

ルクーヴロール



三大悲劇
第一卷
怨

第一幕 武揚公爵夫人の室

長田秋濤譯

箇は是當時有名なる武揚公爵夫人の居間にて、奢美を極むる室内の裝飾は實に人の眼を驚かせり。化粧臺の鏡に向ひて身仕舞せる夫人の傍に在るは齡五十前後の僧なり。

夫人「もうし、面白いお話は其限でござりますか。私は暫く世間へ出ませねば、とんと譯が解りませぬので、お出を待つて居りました所。もう些と艶な話があるなら、どうぞお聽せ下

さりますせ。」

夫人の言より察すれば、此僧身に緇衣を絡ひながら高貴の奥に出入して、貴婦人社会の歡心を買ふ者と見えたり。

僧「其のお話がござりまする程なら、何しに申しあげずに居りませう。」

夫人「話が無いと有仰つては、貴下の御役目が濟みますまい。早く希しい話が聞きたいばかりに、未だ身仕舞も爲ぬ内か

ら、恚して部屋へお呼申したのを、お察しの好い貴僧にもお似合ひなさらぬ、其様な素氣のない御挨拶をなさるものではござりませぬ。さあ、何ぞ聽せて下さりませ。かうお見受申したところ、面白い話が幾多もあると、ちやんとお顔に書いてござりますぞえ。」

僧「其様に被仰ると、こりや何ぞ申上げずばなりませんぬが。」

と少く考へて、

僧「何も申上げるやうな希しいお話はござりませぬが、今宵鹿古嬢と雀羅嬢とが一座でバジャヤセラ(狂言名題)を致します。この事でござりまするが、孰も人氣の女優達、定めて面白い事でござりませう。」

夫人「それが又奈何いたしましたのでござります。」

僧「されば、鹿古嬢と申しますれば、先づ世間一般に大した人氣でござりまする。雀羅嬢の方は又、貴族の方々、奥方、令嬢方が一方ならず御最負をなされます。いづれ劣らぬ玉揃ひ

是は近頃の見物でござりませうて。いや、御最負と申せば、奥方には殊の外雀羅嬢御最負てお在あそばすとやら。」

夫人「私が雀羅最負とは？」

と故と知らぬ貌で言ふ。

僧「いや、もう、世間一統の取沙汰でござりまするが、其評判を聞いて驚かぬ者はござりませぬ。中にはお嗤ひなさる方もござりまする。」

夫人は卒に此方に向直りて、

夫人「何と有仰る、あのお嗤ひなさる方がござりまする……すりやまあ、奈何してござりまする。」

と氣色を變へて語らるゝに、此方は今更困じたる躰。

僧「その譯と申すは、些申難い事でござりまする。愚僧の身分では、何ともお話が致し難うござりまする。」

夫人「私に、あの、言難いと有仰るのでござりまするか。」

僧「いかにも、心苦しうござりますゆゑ。」

夫人「さう承はつては、こりや聞かすには居られませぬ。丁度身仕舞も済みましたれば、恚してお話する間も、う十分間よりはござりませぬ。どうぞ早くも話し下さりませ。」

僧「申上げずば克はぬ次第でござりますれば、致方もござりませぬ、まづ筒様でござりまする。佛蘭西座の雀羅嬢、他が奥方の憎敵と申すことは、よもや御存知ござりまする。」

夫人「雀羅が私の憎敵？……と有仰りまするか。」

僧「然様にござりまする。何方へ参りましても其噂ばかり、御存知ないのは奥方も一人位のものでござりまする。愚僧は恠してお上のお世話に相成つて居りますなれど、奥方の御名譽に係る一大事でござります故、申難いのを忍んで、餘儀なくお話致しまするのでござりまする。」

夫人「あの雀羅には過日馬車もお遣りなされる、金剛石もお遣りなされたて御座りませうかな。」

僧「えッ！」

夫人「そののみならず見事なる第宅まで。」

僧「いかにも、仰せの通にござりまする。」

夫人「其第宅のある處こそ、巴黎廓外に絶景の聞えあるグラン

ジュ、パトリエイル。」

僧「すりや奥方には残らず御存知、いや、驚入つてござりまする。」

夫人「それを知らいて何と致しませう。」

僧「恐入つてござりまする。」

夫人「誰あらう、武揚公爵と申せば、地位と云ひ、財産と云ひ、右に出るものもない御身分、學識とても淺からず、美術は愚化學に迄も秀でられ、何申分無き御發明の御方。」

僧「其の學問が御所好と申すは、眞實御所好で被居れるのでござりませうか。」

夫人「否々、然ではござりませねど、上つ方のお氣に入るやう、

先づ手始には化學の實驗にお凝り遊ばし、御存知の通り、那の様な實驗室までお建てなされ、日がな一日火を焚くやら、薬を煮るやら、それはく目の眩るやうな御働、又其上に、名高き文學者ヴァルテイルのお弟子にお成りなされ、夜深まで文學美術の書をお讀みなさるゝも、皆高貴方の御機嫌を損ねまじとのお心遣、其故世の諺にも申す通り、夫忙しければ妻に用無き道理にて、私に取つて是程 幸な事はござりませぬ。仇し女にお迷ひなさるゝも、時に取つての御鬱散、まあ可いではござりませぬか。殊に雀羅は私が大の最負、手足のやうにも思つて居ります程ゆゑ、此後とも随分力を添へてやる氣でござりますすわいな。」

僧「毎もながらお見上げ申した御見識、愚僧感服致して御座ります。然し、其には何ぞ御考量有つての事、と憚りながら存ぜられまするが……。」

夫人「有る段ではござりませぬ。人も知つたる那の吝嗇の御性質、それには雀羅の色にお迷ひなさるが何よりの名薬、私の氣儘が出来る時節到來したのでござりませう。何と御合點が参りましたか。」

僧「承はつて好く合點が参つてござりまする。」

夫人「それ故世間の取沙汰も空吹く風、何も彼も此胸に盪込んであるからは、躍起勃起することはござりませぬ。其は然うと、お話はもう本に其限でござりまするか。」

僧は惶々と夫人の顔を眺入りて、

僧「否々、まだ一つ取残した事がござりまする。」

夫人「何、まだ一つ？」と打笑めば、

僧「其の取残したと申しまするは、即ち愚僧が身の上の事、定めて御吞込でもござりませうが。」

と云兼ねる。

夫人「まあ何でござりまする。」

僧「餘の義でもござりませぬ、即ち愚僧が……。」

と猶言淀む様子の可笑げなるを見遣りつゝ、

夫人「それでは私の中へ見ませう。然れば此身に心筑紫濁、燃るおもひの胸の内。」

僧「有繫は賢明なる公爵夫人、然なうては稱ひませぬ。然程愚僧の心中御承知でありながら、素知らぬ御顔は、近頃御怨に存じまする。」

夫人「其様なことを私の口から故々御吹聴致すにも及びますませ。」

僧「然やうでもござりませうが、恚して打解けたお話を致しませぬものも、愚僧に一つの望があればこそ。又お上へ別懇の御交際を願ひまするも、全く所存あつての事、お察しなされて下さりませ。劇場へ駈着けいと被仰るれば、駈着も致します。此方へまゐるとならば此方へ、彼方へとならば彼方へ、奥方のお使となれば、何の様な事も決して厭ひませぬ心底。」

愚僧の躰は奥方の下部同然。退屈な上の御講義も、奥方ゆゑに熟と我慢を致して伺ひまする。」

夫人「それは氣毒な事でござります。」

僧「丁度好い折でござりまする、是程愚僧が戀ひ憧るゝ其の御返禮をお遣はし下さりませぬか。」

夫人は微笑みつゝ、

夫人「是迄貴下に差上げました品は幾程か。それに今又此で何ぞ與れいと有仰つても、然うはまゐりませぬわいな。」

僧「否々、只今此で當座の御褒美を下されいとは申しませぬ。」

假初にも神に事ふる身として、何しに穢しい事など申しませう。然ながら、御標致といひ、御氣性といひ、お美しいと申

さうか、お幽しいと申さうか、御目に掛りまする度毎に、餘の忝なさに身も世も打忘れて、いや、もう何と申さう様も無い心地が致しまする。」

夫人「はて、もうお休しなされませぬか。誰ぞ此方へまゐる様子、おゝ、ありや殿様と大門公爵夫人。」

僧「好事魔多し！ はて、残念千萬。」

程も有らせず、交際社會の名花と呼べるゝ華胃の一門、公爵阿綱夫人と、武揚公爵なり。

武揚夫人は、阿綱夫人の前に進み、

武夫人「奈何した風の吹廻しか、阿綱様には、お早くから好うこそお出下さりました。」

武公爵「阿綱夫人の今日お出なされたは、其方に些と御依頼があるとの事。」

武夫人「私の身に適ひました事なれば、何なりと有仰つて下さりませ。それは然と、一昨日からお目にも掛かりませぬ吾夫に、貴下は何處で何時お會ひなされました。」

と阿綱夫人に訊ぬる。

阿綱「伯父不老梨僧正の宅にて圖らずお目に掛かりました。」

武公「いかにも、不老梨僧正方にてお會申した。其方も知る通り、彼僧正には理化學院の一員にて、世にも稀なる當世の碩學、其故に此程物したる自分の著書をお目に掛けしところ、殊の外の御賞美にて、先今日迄に見たる化學の著書の中にて、

恁程愛てたく物したるはあらしとのお言、實に身に取つて此様な満足な事は無いわう。」

武夫人「承つて私までもお嬉う存じます。して外には、何ぞお話は御座りませなんだか。」

折しも一人の僕は、鐵の小函を銀製の臺に載せて恭しく入来る。

武公「其函は其なる卓子の上に置けい。」

僕「畏りました。」

と部屋の間なるルネッサンス風の卓子の上に据ゑて置く。

公爵は夫人に向ひて、

武公「然れば、僧正は那の如く名高き學者なれば、疾に我が技

術の程を見抜かれて、我が爲には此上なき名譽。又此上なき危険の一大事を托せんとの事故、其を承らんと、御訪問致した次第であるぞ。」

と言ふに一同打驚きて、其の一大事とは何事やらんと問寄れば、

武公「それぞ化學的且醫學的解剖にて、即ち此函に入れたるは、其名を相續藥と言做せる不思議の品、家族多きに過ぎて持餘したる折には、即ち一貼用ゐるに届竟の粉藥。」

武夫人「世の中には、ても不思議な藥が有ればあるもの。そりや、まあ、眞實でござりまするか。」

阿綱「些と其の藥が見たいものでござりまするな。」

と件の函に手を掛けんとするを、公爵慌て、推止め、

武公「これ、必ず鹿相を爲されますな。今申したは弓矢入幡噓ではござりませぬ。此の粉藥を唯一匙、手袋または花に振掛ければ、嗅ぐもの直に眼眩み、氣を失ひ、命を落さぬものはござりませぬ。何と可恐い藥でござりませうがな。今私に托された一大事と申すは、即ち此劇藥の分析は愚、適好くは其實験までも爲さん意。どうか確な報告書が作りたいもので御座りまする。」

夫人「ても、まあ、其の様な奇藥が有るもので御座りまするか。昨日は定めて其藥がち役に立つて好い御鬱晴をあそばされたて御座りませうな。」

と夫人は嫉妬の一念燃ゆるが如き面立にて冷笑するを、公爵は僧に向ひて聲を潜め、

武公「あれ、あの嫉妬の眼色は！」

更に夫人に對して、

武公「これ、好い鬱晴などは聞棄ならぬ一言。昨日一日閉籠つて勉強したる結果は此通、其方に見せやうとて、故々持歸りし品、これに疑念を晴らす可い。」

と衣兜より寶石の函を取り出して夫人に示せば、

夫人「こりやまあ美事な金剛石！」

と嘆美の聲を放つ。公爵は僧の手を取り、

武公「是から那の粉薬の分析の話を致さうほどに、聞いて貰は

ねば相成らぬ。」

僧は公爵が得意の化學講義と聞き、又毎の睡氣を催す長談議ならんと、不承く耳を傾け居たり。此方は女同士膝突合せて、

夫人「もうし、些と此指環を御覽下さりまし、何と結構な品ではござりませぬか。」

阿綱「本に美事な指環でござります。形と云ひ光と云ひ、此様な良い品はついぞ見たことがござりませぬ。」

武夫人「もし其處な僧正様、其様に上のお話にばかり聞惚れてお在なさらずとも、どうぞ此指環を些と讀めて下さりませぬか。」

「此方では講義を聴けいと仰せらるゝ、其方では指環を讃めいと仰せらるゝ。なれども愚僧の体は一つ……。」

公爵は餘所の話は耳にも懸けず、

武公爵「いや話のみでは興味が薄い。實物を見するあひだ、些と待つてくりやれ。」

と毒藥の函を取らんとする。

「いや、其御心配御無用になされませ。嗅げば忽ち往生寂滅、何も身の毛が豎立ちます。憊見えましても未々命が惜うござりますれば、其様な物は拜見いたさぬ方が勝手てござりまする。」

公爵は餘儀なく座に復りて、聲低く熱心に説き續ければ、

兩夫人は化粧臺の此方にて、

夫人「お二人が何やら難しい學術のお話最中、此間に些と御用を伺つて置させうては御座りませぬか。」

阿桐「然やう願ひませうて御座ります。」

夫人「して其お話と有仰りますのは？」

阿桐「今世に噂の高い鹿古嬢、女ながらも私は心から惚々致しました。」

夫人「それが、まあ、奈何いたしたのでござります。」

阿桐「武揚公爵様、叔父の宅にて殿様のお話には、明日其の鹿古嬢が當御殿へ上つて、何か面白い詩を讀みまするとやら。」

此言に公爵は弗と耳を留め、此方へ進寄りて夫人に向ひ、

武公「何かの話で失念致して居つたが、明晩其の阿鳥江（鹿古の名）を屋敷へ招ぐ筈に致し置いた。」

夫人「然様でござりましたか。其はまあ結構ではござりますれど、私は何も鹿古嬢よりは、雀羅嬢の方が鼠肩でござります。藝と云ひ人柄と云ひ、比較には成りませぬのに、何方へ参つても鹿古嬢くと、鹿古嬢の噂ばかり、本に腹が立つて、此様な氣の揉めることはござりませぬ。雀羅嬢には敵の鹿古何處ぞで見着次第に睨み殺さにや措かぬ氣でござります。返すくも憎い鹿古！」

と忽ち現はす怒の面色
僧「然様に仰せらるゝものでは御座りませぬ、左にも右にも今

評判の名優ではござりませぬか。」

公爵夫人は較落着きたる體にて、

夫人「其噂が餘り高い故、どうぞ一度は招ぎたいと存じて、私から申込みましたのは八日も前の事、此通返辭が参つて居ります。」

と傍なる机の抽斗より一通の手紙を取出せり。大門公爵夫人は差寄りて、

阿彌「どれ何様な手跡でござりまする、些と拜見させて下さりませ。鹿古嬢の演劇なら、誰方がお尋ね下さりませうが、何の様な用事が出来ませうが、又今死ぬる大病人がござりませうが、其に管うては居りませぬ位、ついで一度も缺かしたと

武公「何かの話で失念致して居つたが、明晩其の阿鳥江（鹿古の名）を屋敷へ招く筈に致し置いた。」

夫人「然様でござりましたか。其はまあ結構ではござりますれど、私は何も鹿古嬢よりは、雀羅嬢の方が景肩でござります。藝と云ひ人柄と云ひ、比較には成りませぬのに、何方へ参つても鹿古嬢くと、鹿古嬢の噂ばかり、本に腹が立つて、此様な氣の揉めることはござりませぬ。雀羅嬢には敵の鹿古何處ぞて見着次第に睨み殺さにも措かぬ氣でござります。返すくも憎い鹿古！」

と忽ち現はす怒の面色。

僧「然様に仰せらるゝものでは御座りませぬ、左にも右にも今

評判の名優ではござりませぬか。」

公爵夫人は較落着きたる體にて、

夫人「其噂が餘り高い故、どうぞ一度は招きたいと存じて、私から申込みましたのは八日も前の事、此通返辭が参つて居りまする。」

と傍なる机の抽斗より一通の手紙を取出せり。大門公爵夫人は差寄りて、

阿綱「どれ何様な手跡でござりまする、些と拜見させて下さりませ。鹿古嬢の演劇なら、誰方がお尋ね下さりませうが、何の様な用事が出来ませうが、又今死ぬる大病人がござりませうが、其に管うては居りませぬ位、ついぞ一度も缺かしたと

はござりまねど、舞臺の上で見るばかり、素顔を見た事はござりませぬ。どうぞ會うて話が爲て見たいと、此程中から憧れて居りました。噂ばかりでも、氣高い幽しい其面影が、何様にあらうと、思遣られまするに、早く何處ぞで神様がお引合なされては下さりませぬかと、心で祈つて居りました。」

武公「然うござりませうとも。此間もさる人の話に、彼の鹿古嬢こそ女優中の女優にて、正しく梨園の女王と申すことごとござりまする。」

夫人「何とでもお讚めなさるは可うござりますが、此の手紙の無禮、無作法、いつそ見ものでござりまするわいな。」

阿綱夫人は受取りて讀下し、

阿綱「有繋は鹿古嬢ほどありまして、文言と云ひ手跡まで、此様な美事な手紙はござりませぬ。お差岡なくば、私に戴かしては下さりませぬか。」

夫人「差岡ない段ではござりませぬ。袖乞、乞食も同じ那の女役者、其手紙に何の用がござりませう、どうぞお持なされて下さりませ。」

阿綱「それは有難う存じまする。」

と暫く思索して、

阿綱「然様なれば、何れ明晩お目に掛かりませう。来るなと有仰つても参らずには居られませぬ私、屹度伺ひまするでござりませう。」

武公「屹度お待申して居ります。其時こそ御一緒に、寛りと
鹿古嬢を見て遣るでござりませう。」

阿綱「どれお暇に致しませう。」

阿綱夫人は席を起ちて戸口まで来りしが、霎時遅ひて後を
振向き、

阿綱「まだ何を伺ふ事を忘れて居るやうな……それく、も
し奥方、其後希らしいお話はござりませぬか。」

武夫人「其の話の間屋の此の僧正さまが、頓と話を卸してくれ
ませぬ故、此様な拂底なことはござりませぬ。」

阿綱「それはまあ心細いこととござりますが、丁度此程當地へ
お出なされたは、那の名高い外國の御方、去年の冬から交際

社會に評判の好い波蘭の末の皇子様……。」

と皆まで言はさず、武揚公爵夫人、

夫人「あの伯爵森某と申す御方とござりまするか。」

阿綱「はい、其のお方は二三日前巴黎にお還りなされたとの事
とござりますぞえ。」

阿綱「如何にも其噂はござりまするが、迹形もない風説にござり
ませぬ。」

阿綱「否々、嘘ではござりませぬ。何より確な證據は此私
がお見掛け申しましたわいな。」

阿綱「それは定めて人違てがなござりませうわい。」

阿綱「何て人違を致しませう。遂二三日前、傳令使をお連れな

されて、お還りなされる處をお見受け申しました。」

武夫「其言が真なら、どうかお報知が参りさうなもの。」

僧「縦んばお還り有つたにせよ、世を憚りて身を隠さるゝは必定。何故と仰せあれ、六萬法に上る負債を還さぬうちは、滅多に世の中へ出ること克はぬ森巢伯爵。」

武公「竹の園生の御連枝でも、六萬法の負債が有つては、威權も忽ち地に墮ちて、落日孤城の境涯とは、はてさて笑止なことであるわい。」

阿綱「此僧正さまには森巢様か大の禁物、何時ぞや那のお方に憂目を見せられなされたとやら、本の事てござりますか。」

僧「これはしたり、其様なことは真赤な嘘でござりまする。愚

僧に於ては大の森巢伯爵信仰にて、那の御方と御懇親を結んでより面白い話は聞きたい傍題、面白い事は爲たい傍題、自と世間も廣くなりませすれば、其方へ罷出ましても話の種に困るやうな義は御座りませぬ次第、いや、もう、日頃傾慕いたし居りまする。」

阿綱「おほい、出傍題の嘘をお吐きなされても、私がちやんと存じて居りまする。本に、まあ口と申すものは重寶なもの、必ず此人の言ふ事を真にお受けなされませぬなえ。」

と言ふうち、表の方にて聲高く、森巢伯爵入來との僕の報阿綱「噂を爲れば影とやら、只今此方へお出なされたと見えませる。」

程なく案内に導かれつゝ入來る森巢伯爵。

曾「これは森巢伯にはお久振にてお目に掛かります。クウルランドのお手柄には恐僧感服致してござりました。」

武公「凱旋の大將、好こそ御入來。先づ御健康で大慶く。」

阿綱「未來の皇帝陛下にはお變もござりませず、お愛でたらう存じまする。」

森巢伯爵は嬉しき躰にて、

森巢「これは何れもお揃ひでござりましたか。皇帝とも大將とも、皇族とも公族とも、存分にお呼びなされい。其お辭に預つて何とも汗顔の至。」

武公「して、クウルランドの政府にては貴下を君主には戴かぬ

のでござりましたか。」

森巢「其の君主に國會は選びましたなれど、御承知にてもあらんが、承引致さぬは彼の露西亞にて、推して帝座に登れば、事難儀に及び、干戈の間に相見えねばならぬ仕儀、父なる波蘭國王にも御心を惱ませられ、先づ此度は帝位を思止まり、固辭せよとの御仰にて、其資格は有りと雖も、餘儀なく輿望に反いてござりまする。」

夫人「而して、貴下は如何なされました。」

森巢「此方とても強つて帝位に登らんは本意にあらず、佛蘭西國王の名譽武官の末席を漬す身でござりますれば、一先づ帝位は棄て置き、御地に参りて、寛々英氣を養ひ、機運の到る

を待つて、他日大いに爲すあらんとする所存でござりまする。」

阿綱「其の御志の程慮外ながら感じ入りましてござりまする。」

森葉「露西亞にては、私が此度の漫遊に付き、國境の外に出しては、虎を野に放つに似て、由々しき禍の種なりと、逮捕の手配物々しく、既に千二百の兵を繰出したる次第、此身一つの爲に、端なく彼政府の物情を動かしてござりまする。」

夫人「其の危いところを、好うまあも一人てお出なされましたなあ。」

森葉「何の其底に驚く事がござりませう、單騎にて其處を切脱

け、見らるゝ通り恙もなく御地へ参つてござりまする。」

夫人「其の御働は薄々承つては居りましたが、然程までとは存じませんで御座りました。貴下のお出こそ私共の家の譽、此様な可慶しいことはござりませぬ。どうぞ是からも折々お出なされて下さりませ。幸ひ明晩は此方にて夜會を催しますれば、是非々々御列席下されますやう、お願ひ申して置きまする。」

森葉「それは何よりの御催、是非お招に應じまするでござりませう。」

夫人「其の夜會の席上にて名高い女優の鹿古嬢が詩を誦みまする等でござりまする。」

森巢伯は鹿古嬢と聞いてはつと駭く氣色なるを阿綱夫人は
見て取り、

阿綱「森巢伯には、其女優を御存知てゐりますか。」

森巢「知らぬでもござりませぬ。」

阿綱「今巴黎の人氣を獨り背負つて居ります鹿古嬢、御覽な
されませうなら、然ぞ御心に慍ふこととござりませう。が、
此方の奥方のお思召は又格別、雀維嬢を讚めちぎつてお在な
されますれど、那の者の藝などは見られたものではござりま
せぬ。」

夫人「それは貴女のお思召違と申すものでござりませう。那こ
そ申分のない名優、別して聲の好さと申したら、迦陵頻伽は

いざ知らず、何と讚めやうも御座りませぬわいな。」

森巢「これは御最負くらべてござりまするか。未だ御國の語に
は未熟の私、藝道の批評などは思ひも寄らず、何方へ旗を振
つて宜いやら直と當惑致してござりまする。」

阿綱「好い加減の事を被仰れませ。昔は知らず唯今では、佛蘭
西人もおよばぬ程、それはく可恐いお達者でお在なされま
するでは御座りませぬか。殊に佛蘭西文學は御得意と、私は
知抜いて居りまする。」

夫人「其様な御隠藝がお有りなされますとは、一向存じませ
んでござりました。」

二時を報ずる時計の音に、阿綱夫人は氣を變へ、

阿綱「迂り致して居りますうち、もう二時でござります。夫は今日ウエルサイエへ参ります筈、定めて歸來を待つて居るでござりませう。」

夫人「何時頃お立ち遊ばしまする。」

阿綱「午後の意に致してござりまする。」

夫人「然やうなればお急ぎなさることは御座りませぬわいな。」

阿綱「もうし、貴僧も最早お歸りなされても可い時分でござりますぞえ。さあ御一緒にお出てなされませぬか。」

僧「さやう致してござりまする。」

と起上らんとする袂を捉へて、

武公「否々、此坊様は未だ放すことは成りませぬ。今朝よりの

化學の講義済まぬうちは、滅多に餘所へは遣りませぬ。」

僧は萎頓せる躰にて、如何にも情なき面色にて夫人に向ひ、

低聲にて、

僧「あれをお聞き遊ばしましたか。惨澹な愚僧が身の程をお察しなされて下さりませい。」

武公「印刷所よりの催促もあれば、此の講義明日にも延ばされまい。さう、早う書齋へ参らうてはないか。」

阿綱「本にお可哀さうな坊さま！然やうなれば皆さま、明晩お目に掛かりませうで御座ります。」

此にて阿綱夫人は奥の方へ、武揚公爵と僧とは、右手なる主が書齋に入り、迹に夫人は四邊を响して伯爵の傍に寄り、

夫人「誠に久闊でござりましたな。二月此方お文も戴きませず、氣を揉んでばかり居りました。今日阿綱夫人のお話に、此程巴黎にも戻りなされたとの事なれど、此度こそは迎も御出は有るまいと、心に決めて居りました。」

森葉「巴黎へさへ出ますれば、何は借措き、早速お目に懸らずには居られませぬ。何を隠しませう、漸う昨晩着いたばかりでござります。」

夫人「それは今朝から未だ誰にもお會ひなされませぬか。」

森葉「會ひましたのは陸軍大臣秘書官、總理大臣、此の二人限でござります。」

夫人「して、彼の模様は何とでござりまする。」

森葉「されば、夙ての望は鴉の嘴と喰違ひ、氣を取落してござりまする。」

夫人「其の御愁傷をお慰め申したものが御座りませうなあ。」

森葉「何と有仰る。」

夫人「伯爵の入來しより、始終其襟に挿したる花束に目を注ぎ居たりしが、此時侍設けたる氣色にて、

夫人「秘書官や總理大臣が、よもや其様な花束をお贈りなさるゝ事はござりませぬまい。」

伯爵「思はず悸つとせしが、

森葉「成程々々、こりや御尤のお言でござりまする。」

夫人「さあ、其の花束は誰にお貰ひなされました。」

伯爵は故と呵々と打笑ひ、

森葉「それなれば申しませうが、此花束に贈主としてはござりませぬ。只今御門前へまゐりしところ、不圖出會ひましたるは、可愛らしい花賣の小娘、たつて買へよと強請りまするゆゑ、幸貴方に差上げやうと存じて、こりや私が求めましたのでござりまする。」

夫人「然うとも知らず、唯今の失禮は御赦しなされて下さりませ。其様に數ならぬ私を思召して、好うお出なされて下さりましたな。」

森葉「御機嫌直れば何より重疊。」

夫人「然やうなれば其の花束を、早う戴かして下さりませ。」

伯爵は花束を取りて夫人に遞し、

森葉「此様な貧しい花束ではござりますれど、私の真心をお受けなされて下さりませ。」

夫人は嬉しげなる體を装ひて、

夫人「本に美事な花束、此様な花はついに見たことはござりませぬ。それは然と、唯今伺ひますれば、折角の御企も御意に任せず、殊に又總理大臣には素氣ない爲向を作るゝとやら承はりましたが、眞實の事でござりまするか。」

森葉「お訊問ゆゑお話致しまするが、いや驚くべき冷遇を受けました。」

夫人「それは然ぞかし御無念でござりませう、其儀ならば、御

企くはだての首尾しゆび好よう運びほこまするやう、屹まご度と私わたくしが心こころを碎くだいて見みませうてござりまする。」

森葉もみぢ「然さやう有あれば此このうへ上の望のぞみはござりませぬ。」

夫人うしな「宜よろうござりまする。直すにヴェルサイユへ参まゐり、及およぶだけ御ご盡じん力りきいたしまして、何なにかの模も様やうは取と取とず御ご報ほうを致いたしませう。」

森葉もみぢ「御ご返へん事は直ち々く参まゐつてお伺うかがひ申まをすてござりまう。」

夫人うしな「此こは左ひだりや右みぎ、人ひとの出入でいりも劇はげしうござりますれば、それには幸さいはひの那あの別べつ荘じやう、グランジユ、バトリエイルこそ屈くつ竟げの隠かく家け。」

森葉もみぢ「其その別べつ荘じやうとは。」

夫人うしな「夫おとこが雀すず羅らの住すま居ひに求もとめましてござりますれば、私わたくしの別べつ荘じやう

も同じおなじこと、必かならず御ご氣き遣ぢは御ご座ざりませぬ。」

森葉もみぢ「這こは忝かたじけなし、貴あなた方たなればこそ其その様やうなる御ご取と捌はき、然しからば其そのへ罷まかり越りすてござりませう。」

夫人うしな「何なにかに便べん好よき那あの別べつ荘じやう、特ととには雀すず羅らが勤まめ篤くしく、二人ふたりの用もちを致いたしまするでござりませう。」

森葉もみぢ「とは又また不よう用じん心せん千萬ばん、二人ふたりが身みの上うへでござりませうぞ。」

夫人うしな「其その御ご心しん遣ぢには及およびませぬ。雀すず羅らを操あやつる私わたくしの手ての内うち、曠あかる事ことではござりませぬわいな。」

森葉もみぢ「とは云いへ……。」

夫人うしな「何なんと有あつりませぬ。」

森葉もみぢが別べつに妹いも脊せを契ちぎれるは、雀すず羅らが敵てきなる阿あ鳥とり江え(鹿か古こ)な

るものを、夫人と己が不義の密會所の、端無くも雀羅が家と定まれるこそ、謂知らず危けれど、心には惧れつゝも、森葉「彼此と御心盡、忘れは措きませぬ。」

夫人「其の御禮に及びませうや。……あの聲音は確に此へ……。」

といふ内入來るは以前の僧。

夫人「誰かと存じましたら、貴下はもう此へ。」

此間に森葉は夫人に謝して立去りぬ。僧は長椅子に身を投げて、

僧「いやもう耐らぬ。六十枚とは上にも餘りに思遣が御座らぬと云ふもの、根も精も續くことではござりませぬ。」

夫人は件の花束を眺入りて、

夫人「賤しき花賣風情が、金銀の打紐付けたる此の花束を賣つて行かう等は無い。それに何やら以前と變つた那の態、是には必ず理があらう。聞けば露西亞の皇女とやらとの縁組さへ、手もなく御辭りなされたとの事、此身に義理立とは此方の慾目、餘所に増す花あつて、其方へ心牽かれたに違は無い。え、腹立しやく、思へば憎きは戀の敵の其女、思知らさて措くへさか。」

此方には件の僧が、

僧「何が何として何とやら、さつぱり理が解らぬ化學の講釋。それも御扶持の手前を思つて、聽いて居れば方圖が無い。慾

は慾なれど、命は命、此役ばかりは務まりかねるわい。」
聞えがしに、

置「俸給を増して下されいと申せばとて、増して下さるゝてはなし。褒美と申せば、身勝手が過ぎると仰せらるゝ……。」
夫人「其の様に愚癡を零さすとも、些と私に頼まれては下さりませぬか。」

置「又しても御用、てござりまするか。而して改つて何御用でござりまするな。」

武夫人「只今此にお在なされた森巢様、奈何でも言交した人のある今の様子、其の探索を屹度貴下にお頼み申しまする。」
置「然様な難しい御頼が奈何して御承が致されませう。」

夫人「難しいなど、は貴下のお利さなるゝ口ではござりませぬぞえ。」

置「一つ道れて又一つ、此様に災難が續きましては、とても命の續くことはござりませぬ。」

夫人「其災難は幸の基、聽て好い芽が出ませうわいな。」

置「そりや實でござりますか。」

夫人「此頼さへ肯いて下されば、好い芽の出るは私が請合、さあ其を樂に此の探索を耽と御請合なされませいな。」

と夫人は立去る。

置「先御承は致したやうなものなれど、容易ならぬ今の難題、爲了せずば日頃の心願成就の時は有るまい。どうぞ好い手

懸が欲しいものぢやが。」
と思案の折しも入來る公爵

武公「其處に何を爲てゐらるゝな。」

僧「降つて湧いたる當座の難題、直と當惑致して居りまする。」

武公「其の難題を解くは學者の務、まづ何事か、云うて見られよ。」

僧「那の御標致好の森巢伯、氣象烈しき勇士にて在せらるれば、戀や情の意氣事は知らぬ顔にてお任なされど、何でも言交した婦人の有りとやら、其を探らねば相成らぬ仔細がござりますれど、さて好い智慧も無く、案じ煩ひ居りまする。」

武公「そりや何でもないこと。」

僧「あのお上には御存知で被在れますか、さやうなれば何卒御教へなされて下さりませ。」

武公「否々。今夜おのつと判明致すであらう。」

僧「然う手軽に参りますまい。」

武公「参るか、参らぬか、賭を致すも一興、首尾よく判明したる其時は、二千法を拂はせませうぞ。」

僧「それは又格外の金高でござりまするな。」

公爵は卓上の鐺を鳴らして僕を呼び、

武公「馬の用意を致させ置け。」

僧に向ひて、

武公「御身も俱に。」

僧「して何處へ御越てござりまする。」

武公「此程雀羅の樂屋へ参りしに、何かと森巢伯の噂を致し、深く契れる婦人を存じ居るとやら、言の端に微見したれば、只今参りて篤と糺して見んと思ふ。」

僧「何分宜しうも願ひ申しまする。」

武公「呪と二千法を承知致すが可い。然らば佛蘭西座へ。」

僧「まづ入らせられませう。」

(幕)

第二幕 佛蘭西座俳優待合室

爰に幾百年間、世界に鳴渡れる佛蘭西座のホアイエイと聞ゆるは、出勤俳優が登場を待つ間の扣所なる大廣間にて、煖爐の上なる大姿見の前に据ゑたるは、此座の守本尊とも謂ふべきモリエルの半身像、隅々なる大理石の柱の上にはラシイヌ、コルチイユなど諸文豪の石像を置き、壁には故名優の肖像畫を懸列ね、總て古びたる室内の裝飾は一々歴史有り、價値有るものゝみ。はや幕開に程無ければ、男女優は相踵いて此に集り來り、彼處の長椅子に倚る者、此處の安樂椅子に控ゆる者、來訪の看客を對手に語る者、將棋を弄ぶもあれば、臺詞

を誦するもあり。

重尾「三曾根さん、紅をお持でござんすかいな。」

三曾根「其の小箱の抽斗にござります。」

穂畦「三曾根さん。」

三曾根「何御用でござります。」

穂畦「今夜は収入が多度ございませうぞえ。」

三曾根「然様でござりませうとも。何でも今夜が阿鳥江さんと

雀羅さんが初發の顔合と云ふので、もう大評判でござります

ゆゑ、少く見積つても五萬法は大丈夫でござります。」

穂畦「それあまあ大したものでござんすなあ。」

團珠井「些と三曾根さん、二番目の幕開は何時でござんす。」

三曾根「然様でござります。八時にもなりませうか。」

紀野「三曾根さんく。」

三曾根「はいく、何でござります。」

紀野「私の持つて出る刀を忘れて下さんすな。」

三曾根「忘れは致しませぬ。安心してお出なさりませ。」

三曾根と呼べる、男は齡五十路餘の座方にて、樂屋廻の事は

細大となく引受けて、其の監督より小道具、會計に至るまで手

一つに管れるなり。

重尾「阿鳥江さんは今夜那の金剛石をお着けなさるのでござん
せうな。」

團珠井「あの女王から下された……。」

重尾「評判の金剛石でござんすわいな。」
 三曾根「那の人も那の金剛石では大抵の苦勞をなされた事ぢやござりませぬ。」

重尾「金剛石で苦勞を爲されたとは、こりや可笑い。一貫目二貫目の品ではあるまいし、金剛石を着けるに何の苦勞が要りませうぞいな。」

之を聞ける三曾根は、世に俳優も多けれど、重尾、團珠井の如く些少の給金に甘んじて、世に知らるゝことも少ければ、慥く暢氣にも居らるゝなれ、今盛名を負へる鹿古嬢の如き地位にありては、人の知らざる苦勞は、甞に藝道の上に止まらじと、漫に阿鳥江の心根を察して、哀を催し居たり。

重尾「三曾根さん、お前さんは何を急に其の様に考へ込んで居なさんす。」

三曾根「否、何も考へては居りませぬ。」

折しも武揚公爵を始めとして侍従の徒潮の如く入來るにぞ、

三曾根「又しても御客様、はて、煩いことではあるわい。」
 重「や、誰かと思つたら紀野嬢、今度の役は大層お立派ださうて……。」

武公「雀羅の評判は又格別なものじゃわい。」

三曾根「阿鳥江さんも、なか／＼宜うござります。」

紀野「これ／＼何を言ふのぢやぞえ。好い年をして、阿鳥江阿

鳥江と、惚れた女か何ぞのやうに、場所もあらうに御客様の前で、ちと飭ましやんせ。」

三曾根「飭めとは何を飭むのじゃ。」と艶然となる。
紀野「老老の癖に何を……。」

と今にも掴みかゝらんず勢に、三曾根は忽ち顔色を和げて、

三曾根「誤つたく、私が悪うござりました。了簡して下さりませ。」
と右手の入口に目を着けて、

三曾根「あゝ、阿鳥江さんが此へ。」
僧「成程な、頻に臺詞のお温習と見ゆるわい。」

間もなく出来る阿鳥江(鹿古)は二十ばかりと見えて、態度都雅に、容色凄艶なる梨園の名星。
僧「やあ、艶麗々々。」

阿鳥江「チャズイユの坊様でござりましたか。好うお出なされました。」

武公「美事〜。」
重尾「美事と被仰れますると、何やら那の金剛石の事のやうにも聞えまするではござりませぬか。」

武公「女王より下し置かれたる金剛石、それも美事。して阿鳥江嬢には何を其様に御研究あるのじゃ。」

阿鳥江「臺詞を覚えませるも、容易いやうて骨の折れるもの、

覺ゆるばかりで意が解りませぬば、本當の所作は出来ませぬ故、此様に先程から稽古を致して居りまする。」

言ふうち二三の俳優ははや幕明とて追々出する。

阿鳥江と三會根とは稚さよりの親昵にて彼の一貧家の可憐なる娘なりし頃より、三會根は我子のやうに愛しみ、今は親子も及ばぬ愛情あれば、身の上の一切は皆此老人に委せたり。阿鳥江は三會根を見着けて、

阿鳥江「今宵は一世一代の私の囁、貴下が居て下さんすばかりで、何のくらゐ心強いか知れませぬわいな。」

三會根「其事が氣になつて、私も今朝から陸々食物が吭へ通りませぬ。其方の事ゆゑ失敗はなからうとは思へど、どうぞ首

尾好う遣つて却けて下されや。」

此時樂屋中を聲高く、序の幕開を觸れ行く聲頻なり。

阿鳥江「私は丁と支度が出来て居ますわいな。」

團珠井「此様に支度は致しましたが、一番目には用のない私」

紀野「それは然と、雀羅さんは何爲さんしたのでござんせうな。」

三會根「十五分も前に衣裳を着けておいてなされましたが、何か手紙を書いてござりました。」

武公「雀羅は手紙を書いて居つたと。」

三會根「何ぞ急ぎのお手紙でござりませう。」

團珠井「何處どの待人への御文でござりませうわいな。」

武公「何、待人への文……？」

重尾は公爵の耳に顔を寄せ、

重尾「其文の事悉皆私がお聴かせ申しませうが、雀羅さんの召使の那の……、」

武公「辨六？」

重尾「其の辨六さんが先程、何か紙の小片に書いた文を持って之を殿様は屹度高くお買ひなさるゝであらうと、此様に申しましてござんした。」

武公「何、其文を高く買ふとは……。」

重尾「其言で見ますれば、他は貴下への文でないのは知れたこと、然しまあ當にならぬが人の言、何のやうな間違があらうも知れませぬば、滅多に御信用あそばさぬが宜うござります

るわいな。」

悪味「なれども御用心が第一でござります。」

武公「こりや油断は成らぬわい。(僧に向ひ)これより直に辨六に會うて、搜つて見ねば相成らぬ。」

僧「飛んだ御心配でござりまする。然らば又何處でも目通いたしませうや。」

武公「三幕目の濟む時分此で會ふと致さうか。」

僧「畏りました。」

三替根「さあ始りますぞ。重尾さん紀野さん、早うお出なさりませ。」

と急立てられて、女優何も舞臺へ出行く。

跡に公爵は不安の面色、

武公「然る事もあらんかと、常々辨六の態に目を着けしに、氣の許されぬ奴ではあるわい。」

と少時思案の後、悄悄と出行けば、片隅なる椅子に倚り居たりし三曾根は、阿鳥江が持ちたりし臺詞の書拔を眺めて、三曾根「不斷から此私を心切にしてくれる那の阿鳥江、五年の前から、今も打明けやうかくと、口迄出るのを今日が日まて熟と抑へてゐる切なさ、未戀の色といふことは知らぬ顔の處女なれば、汲知らう筈はなけれど、一日延れば一日年を取る、とはいへ、阿鳥江は此座の女優の頭、此身は犬馬のやうに逐使はるゝ情ない體、それに娘のやうな那の女を、あ

ゝ思ふまいゝ、こりやさつぱりと諦めて了うたが可さうな、然し、云はねば濟まぬ胸の中。」

と静に阿鳥江の側に寄り、

三「其の様に凝らすとも、些と氣を休めたが可ござります。」

阿「有難うござります。」

三「今度の役は取別骨の折れる大役、私も永う此様な事を爲てをりますゆゑ、覺えた事もありますれば、内證で些とお教へ申したい事がござります。」

阿「此の私に教へて下さるとは、三曾根さん、何のやうな事で御座んす。」

三「外の事でもござりませぬが、此方の那のポオルガの雜殺屋

の爺さん覚えてござりますか。」

阿「よう覚えて居ります。」

三「那の爺さんが此程ほつくり往生をされましたわいの。」

阿「そりや、お氣毒な事でござんしたな。」

三「然しまあ、知つての通の大金持ゆゑ、私に遣るといふて、遣してくれました金が十萬法。」

阿「然ぞお嬉しいこととござりませうな。」

三「何の嬉しいことがござりませう。ついに金を持つた事のない三會根、其様な大金を持つて、いやもう、酷い迷惑。扱奈何して可いやら、外に考とても御座りませぬゆゑ、此中から思案を致しました揚句、何時迄も恸して獨身で居やうより、こ

りや女房を持つが身の爲と、まあ此様に思着させました。」

阿「それは善うござんすわいな。(と暫く考へ)實は私も然した事がござんすゆゑ……。」

と言ふを、三會根は嬉しげに、

三「あゝ、此方も其氣かござりまするのか。」

阿「此程の私の評判は御存知でもありませんが、此の阿鳥江の藝が變つて來たのにお氣が着きましたか。」

三「いやもう、日増に酷い上達、變つた段ではござりませぬ。

そしてまあ、一昨日のフェイドルの出來と云ふものは、あや人間業ではござりませぬわいの。」

阿「那の日は丁度氣分も勝れませず、何やらフェイドルのやう

な氣持がしたゆゑ、それて其様に見えたのでござりませうが、
 那のやうな廻合は滅多に有るものではござりませぬ。」
 三「フェイドルのやうな氣持とは、何のやうな事てござりまする。」

阿「噂に聞くは軍の事はかり、何爲されたやら御身の上も定ならず、明けても暮れても其事ばかりが案じられ、逆も頼のない戀ならば、いつそ死んだが増てあると、思ふ心が達いたやら、御身の上には恙もなう、世にも嬉しい今日の御目もし。」
 三「何と被仰りますす？」

阿「さあ其の御方が今日お出なされたゆゑ。」
 三「そんなら此方は、疾から惚れた御人がござりましたか。」

阿「さいな。稚い頃からお世話になつた此方の事、何の隠蔽を致しませう。」

三「そりや、まあ何云ふ譯か、早う聽せて下さりませ。」

阿「忘れもせぬ二歳前、那の假裝舞踏のあつた折、オペラを出て馬車に乗らうと爲る所を、數多の士官達が行手を遮り、酔漢としてそれはく無體の舉動、奈何なる事かと心も心ならぬ其折から、思掛ない御方の御助、大勢の中へ割つて入り、何故なれば纖弱い女を捉へて此の狼藉、鹿古嬢を知つてか、但し知らずにかと御聲をお掛けなされしところ、士官達は矢庭に其の御方を取つて押へて滅多撃、私は手籠になる事と、生きた心地は無かつたに、其の御方は遽に直然と起上り、腰な

る劍をお抜きなされ、人々其女を辱めんとならば、先我と斬合ひ給へ、と聞くさへ雄々しい御一言、又私へは、氣違あるな、其にて見物せられよ、と有仰る間もなく丁々と闇に閃めく劍の稲妻、看る／＼うちに多勢の士官は打負けて、四方八方へ散々離々、氣味好いこととござんしたわいな。」

三「そりや其の御方のお力で。」

阿「助かりましたわいな。」

三「それから後を聴かせて下さりませ。」

阿「其翌日わざ／＼お訪ねなされて下されたゆゑ、御話を承りますれば、段々彼方は佛蘭西の御方ではなうて、名も財産も無き士官の身なれど、位は人の器量次第と、天晴頼しい御

氣象、その御心を見抜いたと言ふてはなけれど、此様な事が御縁になり……。」

三「而して其後は。」

阿「其御方は間もなく波蘭の皇子薩克斯伯の御供をなされ、御國へお出なされたは三月前、如何なされた事と案じ暮して居りましたに、漸う今日お歸りなされたとて、お目に掛りは掛つたなれど、積る話が残つてゐる故、今宵此へお出なさるゝ御約束でござりますわいな。」

三「そんなら其のお方が此處へ。」

阿「さあ、私の藝を御覧なさるゝ等とござんす。」

三「然云ふ事なら猶更大事の場所、大抵氣骨のお折れなさるこ

とてござりますます。」

阿「何の其の様なことがござんせう。」

三「でも今日は雀羅との顔合せ、随分氣を着けたが可うござりますぞえ。」

阿「そりや心得て居りますわいな。」

三「萬一の事が有つた日には貴方が一生の恥辱、必ず雀羅に敗を取らぬやう、其の御方の方など見てはなりませんぞ。」

阿「本に然てござんす。其の御姿が目に着くやうでは。」

三「それこそ貴方の身の終、此迄の苦心が皆書餅となりませる。何ぞ首尾好う勤めて下さりませ。戀や色は當座のもの、名は末代と申すこともありませれば、必ず氣の散らぬや

う、其の心懸が肝心でござります。」

阿「はで、まあ其の様に心配して下さんな。」

三「でもあらうが、雀羅に負けたと言はれては、此私までが肩身が狭うござります。」

阿「屹度敗は取りませぬ程に、安心して下さんせ。」

三「それで、漸う落着きました。」

と眞身の誠に阿鳥江は哀を覺え、其手を把りて暫は言も出でざりしが、三會根は氣を取直して、

三「私としたことが、何を言ふやら他愛も無い事を。そして臺詞はもう宜うござりますかえ。毎も悪いところは、那の「嫉妬の餓に身を焦す」といふ文句、頓と氣合が乗らぬゆゑ、今

夜は必ず爲損せぬやう。」

阿「よう心得て居ります。そして今のお内儀さんの話は何爲さんした。」

三「いや、もう、其の女房が急に嫌になりました。那樣事よりは萬望舞臺で敗を取らぬやう。くれぐれも頼みますわいの。」

阿「はて、吞込んで居ります。」

三「可うござりますか。」

と心は底に苦痛を忍びて、悄悄起つて行く間もなく、入來し森巢伯爵は室内の裝飾に見惚れつゝ、

森巢「有弊は世界の佛蘭西座、此の善美なるポアイエイは座に尊敬の念を起さしむるわい。」

臺詞に心を褫はれ居たりし阿鳥江は弗と其姿を認めて、

阿「やあ、貴下は森巢様。」

森「あゝ、阿鳥江嬢！」

阿「今にも舞臺へ出ねばならぬ私、今朝御話のワエルサイエの首尾は如何でござりました。」

森「どうも思ふに任せませぬ。」

阿「すりや上役の薩克斯伯爵には、貴下の爲されます事が御氣に召さぬのでござりまするか。」

森「如何にも其の薩克斯伯と云ふは、噂に高き殿しる人にて、

戦争中も些も御側を離されず、遂に手痕を負ひましたほどの始末、容易な事では吾が願も……。」

阿「今巴黎の交際社會に隠も無き薩克斯伯爵、どうぞして御目通を致し、貴下の御身の上をば願ひ申すてござりませう。

して、陸軍大臣には御面會なされましたか。」

森「未だ面會は致さねど、書狀を以て。」

阿「いえ、其の手紙は書きたらぬが宜うござりまするわいな。」

森「そは又何故。」

阿「此程下されました那の文、濃かなる御心は籠つてをりますれど、失禮ながら言が調つて居りませぬ。佛蘭西文にはお馴れなされぬ事なれば、お手紙は休めなされたが可いやうに存じまする。」

森「其は千萬忝ない御忠告、然し學士會員とも成らんとならば卒知らず、其様な事は敢て意を留るほどにも御座らぬ。」

阿「然やうでもござりませうが、貴下が佛蘭西文に精うお出なされたならば、其の玉のやうな御人品にいよく光を添へるてござりませうと存じまして。」

森「さう有仰つて下さる故、此程より那のホルチイユの劇、心を籠めて讀んで居りまする。」

阿「フホンテイヌの物語は？」

森「雨と降り、木の葉と散來る彈丸の中に在りても、疵と身に添へたるは其のフホンテイヌ。」

阿「そして、お讀みなされましたか。」

森「つい未だ読みは致しませぬが……。」
阿「すりや、那の夫婦鳩の物語も。」

森「いかにも夫婦鳩の物語は承りましたなれど、那の様な物語は頓と興味がござらぬゆゑ。」

阿「それや又何故でござります。物語には深い寓意の籠つたもの、那の夫婦の鳩の情愛は……。」

森「二人が身のうへにも比べられ……。」

阿「己が巢に飽果て、遙けき空に旅立つ雄鳩。」

森「私の様なものてござるわら。」

阿「其情愛の濃かさ、定めても読みなされし事と存じましたに。」

森「自ら読みまするよりは、兎角貴嬢に伺ひまする方が如何ばかりか身に浸み、肝に銘じますれば、過日もお約束の稽古を、早うお始めなされて下され。」

阿「そのお稽古を致しませう程に、今宵劇の果ます時刻に、萬望宅へお越なされて下さりませ。それは然と、もはや舞臺へ出まする刻限。」

森「後程お目に掛かりませう。」

阿「而して貴下は棧敷へお出なされますか。」

森「一等棧敷の右側にて、篤と拜見致しませう。」

阿「そんなら臺詞のお解りになりますやう、屹度其方に目を着けて、一生懸命に致しませうわいな。」

と阿鳥江は舞臺へ、森巢は右手へ入る。重尾、武揚公爵續いて來り、

武公「いやもう、何彼と一方ならぬ心盡、何とお禮を申さうやら。」

重尾「そのお言に及びませうや。兎角儘にならぬが憂き世、御心配な事でござりまするなあ。」

武公「何にもせよ、言語道斷の女奴が振舞！」

重尾「本にお氣毒な事でござりまするわいな。」

此時入來し以前の僧を見て、

武公「今時、何爲に此へ？」

僧「お上には又如何なされました。」

武公「驚くべき一大事となつたる故。」

僧「一大事とは、それや何事でござりまする。」

武公「其は扱置、先刻薩克斯伯の身の上にて、圖らず賭事を致せしが……。」

僧「其の薩克斯伯につい其處で出會ひましてござりまするが、不斷入込み居るに相違ござりませぬ。」

武公「言はずとも知れた事、早や残らず解つたるぞ。」

僧「今日は第一番の三號に居りまする。」

武公「それは何より。伯が戀する其女を探るには屈竟の首尾。」

僧「とは又何故。」

武公「此なる重尾嬢の働にて、様子は略相解つたれば。」

僧「それには何ぞ確な證據が？」

武公「證據と云ふは即ち此文。」

と一封を取出して見すれば、

僧「え、何々……色々お話申上たき事候へば、今宵十時にグ

ランジュ、バトリエルへ御入らせの程念じ上まらせ候。委

しくはお目もじの上申あぐべく候。」

武公「何と雀羅が文に相違あるまいがな。」

僧「然様相心得まする。」

武公「雀羅に附置く辨六より請取るからは確な證據。」

僧「して如何致してお手に入りました。」

武公「高價を以て買取つたるわ。恚知れし上からは、此まゝに

は差措かれず、其方も一臂の力を添へてくりやれ。」

僧「仰せまでもござりませぬが、其の御用と被仰らるゝは、何の様な事てござりまする。」

武公「明日ともいはず、今夜直に手等を定めて、目前に事落着させねば相成らぬ。」

僧「然し、手荒な事は緇衣の手前もござりますれば。」

武公「此身に耻辱を興へし人非人、何用捨のあるべき。」

僧「然やうでもござりませうが、世の聞え、人の所思もござりますれば。」

武公「恚なる上は隠さうとても隠されず、世間へ流布するは覺悟の前。」

僧「其の御耻辱を雪ぎなさるには、何ぞ外に好い工夫が……。其の二人はグラシエ、バトリエルの御館にて密會など致すのでござりまするか。」

武公「如何にも。」

僧「然やうなれば好い工夫がござりまする。今宵其の刻限に是なる佛蘭西座の一座を御連れなされ、其とは言はず存分に邪魔を入れてお遣りなさるゝが、面白さうにござりまする。」

武公「實にそれも一興ならん。」

僧「其の費用こそ愚僧が受持、賭に負けた罰として。」

武公「はて近頃の大奮發、こりや其の意氣組では必ず首尾好う参るであらうわい。」

と公僧悦に入る。

僧「兵は神速を尙へば、愚僧は是より一座の者を蒐集めに。」

武公「何事も隠密に、必ず雀羅の一條をば話さぬやう。聊か所存あれば、彼の女奴を窺むるには、真綿で首と云ふ手が何より。」

僧「委細心得てござりまする。」

折しも舞臺の方より湧くが如き喝采の此もとに響動めき來れば、

武公「誰の開幕か、那の大當を此方にも。」

と獨語つ時、入來し三會根が、

三會「お上には此にお在なされましたか。あれ〜、那をお聴

さなされませ。今阿鳥江嬢の所作の最中、雀羅嬢が何程氣を
お採みなされても、月の前の燈火同然、見物の目に入ること
ではござりませぬ。何と阿鳥江嬢の腕前は凄（すご）いものでござり
ませうがな。」

武公「然（さう）であらう。其（それ）でこそ此胸（この胸）が晴（は）れると申（まを）すもの、雀
羅嬢（さくらぢやう）ははや恥（はづ）の搔（か）初（はじ）めを致（いた）し居（を）るわい。」

と心地（こころ）よげに手（て）を拍（う）つて迥（は）か阿鳥江（あとりやう）の喝采（かつさい）に和（な）しつゝ彼方（あなた）
へ去（さ）れり。三曾根（さんそうね）は舞臺（まいたい）の方（かた）へ身（み）を寄（よ）せ、耳（みみ）を引（ひ）立てゝ、

三「さあ、此（これ）が千兩（せんりやう）だぞ！ 那（あの）、まあ舞臺（まいたい）の静（しづ）なことわい。其（そ）
處（こ）々々（さ）！ 那（あの）臺詞廻（まいことまはし）の好（よ）いことわい。其（そ）處（こ）を然（さ）う張揚（はりあ）げ、其（そ）
處（こ）を然（さ）う低（ひ）げて、いや出来（でき）たぞ！——いや感心（かんしん）！」

と猶（なほ）も耳（みみ）を澄（す）ましつゝ、

三「あつと、然（さう）ら早口（はやぐち）に言（い）うては悪（わる）い、可（よ）し、うむ可（よ）し、それ
で先上（まづしやう）出来（でき）。いや好（よ）い聲（こゑ）だぞ。……あつと、それも可（よ）し、
それく……こりや、やい、手（て）を拍（う）たぬかやい。」

拍手（はくしゆ）の音（ね）起（お）る。

三「拍（う）つてく！！もつと酷（こつ）う拍（う）たぬかやい。とは謂（い）へ、那（あの）やう
に身（み）を入（い）るゝも、威（み）な可（か）愛（あ）い男（おとこ）に見（み）せうため、其（それ）を思（おも）へば腹（はら）
立（た）し。」

と一旦（たんに）は憤（い）りしが、

三「これ阿鳥江（あとりやう）、何（なん）も言（い）はぬ、俺（おれ）は其（その）聲（こゑ）さへ聞（き）けば、穢（ふ）土（ど）に
居（を）るとは思（おも）はれぬ、何（なん）も彼（か）も忘（わす）れて了（しま）うて、此（これ）の様（よう）な嬉（うれ）しいこ

とは無いぞよ。嬉しいは嬉しいが、又悲しいやうな……いや〜
 く、何も言ふまい、明が日俺は死なうとも、嗚呼、噫思残
 す事はない。もつと拍つた〜！拍つて〜、手の腫上るま
 て拍つた！」

團珠井入来る。

團「あの、まあ、狂氣のやうな見物衆、那の様に手を拍つたら
 掌の皮が剥けて了うて、明日の仕事が出来ぬであらうにな
 あ。」

僧入来る。

僧「いや、どうも何とも謂へぬ。」

團「阿呆らしうて物が言へませぬわいな。」

秘唾「私は馬鹿々々しうて〜。」

紀野「私は胸かむか〜して来たわいな。」

武公「今日まで身が見た芝居も多けれど、此の様な面白いのは
 初發じゃわいな。」

折しも入来る阿鳥江は悄然として愁を帯びたり。

武公「鹿古嬢にも今宵は必ず来ておくりやれ。」

僧「それは、もう、丁とお招き申して置きましてござります。」

阿「あの、私を。」

僧「誰方にもお出あるやうお話を致して置いたれば、貴方とて
 も御同様。」

阿「有難うはござりますけれど、些差支がござりますれば。」

重尾「當時口の出の鹿古嬢、流石も高い事でございますなあ。」
 阿「滅相なこと有仰ります。些心持が勝れませぬ故、それでも
 斷り申すのでござんすわいな。」

魚「いや、然やうなれば尙以て氣晴旁、ち出あるが可うござ
 る。彼の交際場裡に名も高き薩克斯伯にも越なる事な
 ればお相識に相成らるゝには此上も無き好機會。」

阿「そんなら、あの、薩克斯伯にも今宵のお催に？」

魚「何と珍客でござらうがな。」

阿「何時ぞはお目通を致したいと存じ居りましたに、願うても
 ない今宵の首尾。」

魚「御席は伯の傍に置くやう愚僧が取計ふて御座らう。」

阿「参りたうもござりますれど、舞臺を退さすれば疲れも致
 し、夜も更けまする、お連れ下さる方もござりませぬば。」
 武公「其の心配は要らぬこと、衆が同道致すであらう。」
 阿「いえ、それには及びませぬ。」
 武公「然らば單身にてお出あるか。雀羅の住居は存知居らるゝ
 であらう。」

阿「私方とは隣合、ち庭の奇麗な。」

武公「如何さま、直に庭續き、此鍵にてつい切戸より。」

阿「有難うはござりまするが、どうも今宵は。」

魚「三會根さん、此方は差支ござるまいな。」

三「はい、用事さへ済みますれば、参る段ではござりませぬ。」

阿鳥江は既に、森巢が違約の文を見て、心中幾多の痛恨あり。此時表の方より五幕目の幕開を觸れ行く聲すれば、阿鳥江は此を辭じ去る。迹に大勢異口同音に、

三「今夜のお催には、何ぞ變つた御趣向が。」

僧「ある段では無けれども、天機暫く泄し難し。」

三會根大聲に、

三「さあ、五幕目の開場じやく。皆御馳走と聞くと舞臺が留守、其様に意地が汚うては、好い役者には成れませぬぞ。」

僧及び公簡に向ひて、

三「殿様が此にお在なされては、役者衆が舞臺を勤めませぬ

故さ、彼方へお越なされて下さりまし。」

第三幕 武揚公爵別荘の一室

グランジュ、パトリエールの別荘の一間に、夜は早や十時を過ぎぬらん、唯獨り椅子に倚りて物案貌なるは武揚公爵夫人なり。

夫人「待つ身の辛さとは聞古した文句なれど、思當つた今宵の此身、今か今かとお待申せどお出の無いは、案じらるゝ事じやなあ。雀羅に頼みし那の文は確にお手渡したとあるからは、御覽なされたに違は無いに、今迄御姿の見えぬと云ふは、外に最愛の人あつて、其方に心寄せらるゝか。身苟も公爵夫人と成りてより、無禮を受けし覺は無さに、戀なればこそ慥し

た憂目も見ろのじやなあ。」

此時近き寺の鐘鳴る。

夫人「ありや、もう十一時。憶出せば去年の春此にて首尾せし其折は、時間を差へずお出ありしに、御身の大事を頼みながら、其の吉報が一刻も早う聞きたうは思召さぬのか。」

と心安からず居る折から、忍び來れる森葉伯、

夫人「癢にから御案じ申して居りました。」

森葉「然ぞかしお待兼の事ならんと心も心ならず、漸う只今、

遅りましたる段は幾重にも御容し下され。」

夫人「そのお詫では傷み入ります。十二時には是非歸らねばならぬ私、其故に心を傷めて居りました。」

森葉「實は佛蘭西座を立出て、此方へと急ぐ途中、何者とも知れず、人の迹を尾けたる氣勢に、日蔭の身にござりますれば、若やと虞れ、左右して其曲者を逐攘ひ、漸く御殿へ近づく頃に、又もや帽子目深に、外套に身を裹みたる異しの人影、二人まで行手に立塞り居りますゆゑ、何者なれば無禮の舉動と聲を掛けたる所、後をも見ずして遁去りしが、其や此やに手間取りて、思はず遅参いたしてござりまする。」

夫人「それは思懸ない御災難、御怪我も無うてお慶たう存じまする。扱申上げましたる通り、那より直にヴェルサイユへ参り、陛下に直々言上申しましたれば、いと易う御聴濟遊され、時を移さず總理大臣へ申聞けんとの有難き御言。」

森葉「それは千萬 忝なう存じまする。して又總理大臣には。」

夫人「其もお氣遣なされますな、屹度引請けたとの事でございます。なれども、此に一つの難儀と謂ふは……。」

と少時遅ひしが、

夫人「立入つたるお尋を致しまして、何とも失禮ではござりまするが、財政の御都合は如何なり居りますやら、お聴かせなされては下さりませぬか。」

森葉「實以て慙入つたる次第なれど、今と相成りましては身一つでござりまする。」

夫人「承はりますれば、少からぬ御負財との事にて、瑞典の伯爵某の君への分のみにても、七萬法以上とやら、此儀は如何

ござりませうか。」

森葉「そは又何故の御詮議。」

夫人「只今の有様にては、恠して出なさるゝも危き御身の上、露西亞政府は警察の手を以て、貴下を召捕らんと、それはそれは嚴しい手配。」

森葉「さては思當りし只今の曲者、目に物みせて遣すべさところ、残念な事を致しましてござる。」

夫人「そのみでは御座りませぬ。瑞典の其の債權者とやらも、巴黎に足を留めをりますとの噂、御用心が肝要でござりまする。」

森葉「債權者が何と致しましたな。」

夫人「其の債權者の此地に留まる由を知りて、若し露西亞より教唆しなば、御身に縲維の憂き目を見するは必定。」

森葉「返すくも卑怯の行動、謂はうやうなき敵の奴原。」

夫人「さう致さねば、枕を高く寐られぬ露西亞、心ず御油断なされますな。」

森葉「身に取り難存き御忠告。思へば此身一つの置處とても無き武運の拙さ、此先如何致して可からうやら、はたと當惑致してござりまする。」

夫人「女ながらも其には思案もござりまする。警視總監へ申入れ、其の瑞典人の住居を聞置きましたれば、直々にお會ひなされて、負財をお返しなさるゝが、第一でござりませう。」

森葉「其に上越す策はござりませぬが、何を言ふにも六萬法以上の金高なれば。」

夫人「それをお助け申上げたいは胸一杯でござりますれど、何も力に及びませぬが残念にござりまする。」

森葉「それまで御高配を勞して可いもので御座りませうや、何とか自分に工夫も御座りませう。」

夫人「どうぞまあ、好い御工夫をなされて下さりませ。」

森葉「聊か所存もあれば、直様此地を離れて何方へなりと身を落身け、クウルランド討伐の計回らさん覺悟にござります。」

夫人「いかに力をお落としなされたとて、其は又餘りに思慮なき

爲され方。」

森葉「否々、祝祭、禊應には婦人の教を仰ぐ例もあれ、軍旅の大事に巾幗の容隊存じも寄らず。武威を揚げんか、屍を曝さんか、はや方寸に決してござりまする。」

夫人「其様に仰せられても、此をお立なさるゝには未だお早うござりませう。今四五日の其間、私がお止め申すからには、お放し申すことはなりませぬ。幾月明け暮れ待焦れて、漸うお目に懸かりながら。」

森葉「はて、其處を御聞分けはなされませぬか。曾て御心に背かぬ私、申上げたきこともござれど、夫人の所思いかと存じて、今までお包み申しましたる一條、差當つたる身の難儀

に、最早申上げずばなりません。夫人「外にお情懸けらるゝお人が有ると有仰るのでござりませうかな。」

森葉「其者の身分を申せば、固より夫人とは天地の相違。」

夫人は故と落着き貌、

夫人「さあ誰方でもござります、其をお聞かせ下さりませ。人に因つては私にも覺悟がござります。」

森葉「さ、其の御立腹ゆゑの遠慮、迂濶には申されませぬ。其様に有仰つては、何も彼も包み隠さねばなりません。包み隠さば反つて悪しからんと存じまする故、申上げたらはござりども……。」

夫人「私とても聞かずに措かれませうか。さあ其のお人といふは。」

森葉「申さば二人の間は不義の情契、逆も此まゝにて始終渝らぬ御交際は成りませぬ。改めて渝らぬ心の契りを結ぶには身を潔う致すが肝要。夫人より受けたる御恩は山より高く、如何なる御意にも背くまじき私なれど、又人間の自由は自由にて、こりや別なれば、何卒其邊の御斟酌下さるやう。」

夫人「其理を辨へませぬでも無き私、今更事新しう貴下から承るまでもござりませぬ。」

森葉「然やうには仰せらるけれど、我人ともに戀には陥るが世の慣。」

夫人「憎む仇の女の名、命にかけても聞出さねば措かませぬ。」
森葉「や、表の方に騒がしい物音、那の車の響を聴きなされませ。」

夫人「何、車の響か？」

森葉「誰ぞ此方に参る筈でござりまするか。」

夫人「否々、雀羅の歸るばかり。」

森葉伯は起つて窓より外を眺め、

森葉「御覽なされい。あれ、那の馬車を御存知でござりまするか。」

夫人は倉皇しく窓際に倚りて、馬車に目を着け、

夫人「やあ、那ぞ正しく夫の馬車！」

森葉「えー！」

夫人「今下りたるは、紛れもない夫の姿。」

森葉「如何なる理でござりまするか。」

夫人「更に合點が参りませぬ。而して那の大勢の人達は？」

森葉「いかにも、夥しき人数の様子。あれ、玄關に聲音が致しまする。」

夫人「こりや、まあ、奈何いたしたら可うござりませら。」

森葉「私此に居りますからは、お氣遣には及びませぬ。」

夫人「否々、此場の有様を見付けられては、左にも右にも身の大事。申すうちに早此へ参りまする。さ、此方へ行けば喫咽室、早うお出なされませ。」

と促し立て、隣の室に駈入れれば、踵いて入らんとする森集伯、其姿は早くも入來る武揚公爵と僧との目に入りたり。公爵は後背より、

武公爵「それへち越あるは森集伯、何地へお出なされまする。」
呼懸けられて爲ん方なく、

森集「こりや公爵には何時の間に。」

公爵は微笑みつゝ、

武公「又伯爵には如何なる御婦人を御同伴ありしな。」

森集「いや、私一人にござりまする。」

武公「確に見たる婦人の姿、然も白き服装にて、那方へ影を隠されたは、豈僻目ではござりませう。何と薩克斯は佛蘭西

の虜と相成つたて御座らうがな。」

と笑ふ。

森集「何と仰せらるゝ。」

武公「此期に及んで隠蔽を遊ばさるゝは、將軍の平生にもお似合なざらぬと申するもの、恁なる上は、さゝ尋常にお名乗あそばしませ。」

武公「但又事實無根たる確な證據はしござりまするか。」

武公「いや何、伯爵、不肖ながら此法師、目の玉にては千人力、

うんと一つ睨みましたが閣下の最期でござりまする。」

森集「然やう御座れば、強ひて隠蔽をいたす程のことにもあらず……。」

武公「勿論四箇の眼が證據。」

森葉「此上は御存分に相成り申す。(僧に向ひ) 貴下をば證人に
此裏は幸ひ庭地、左右申さうより刃を以て黑白を分たうては
ござりませぬか。」

僧「さ、それは御短慮と申するもの。吾々とても此場に於て結
局を着けやうとは申しませぬ。随分ともに行未愛でたく、今
のやうに遊ばされたが御身の爲ではござりますまいか。公爵
とても、那なる婦人が貴下の御心に適うたとあれば、潔うお
譲りなさるゝに何御未練かござりませうや。」

森葉「何と?!」

僧「さ、これで平和條約相成りました。此上は一大宴を張り。」

武公「シヤンパン盃の音を樂に擬へ、快く一酌いたさうではご
ざりませぬか。」

と公爵と僧とは高く笑ふ。

森葉「お笑ひなさるゝは?!」

僧「然やう眞面目にお構へなされては恐入りまする。」

武公「もはや何も申さず、露も怨はござりませぬ。雀羅が事は
御心任……。」

森葉「何、雀羅?!」

武公「さ、其の雀羅は思切つて、奇麗にお手元へ献じまする。
然れば此方は面縛して軍門に降るも同じ事。薩克斯國萬歳!」
僧「薩克斯伯萬歳!」

武「先は愛でたく濟んで重疊。然し、森巢伯には何やら濟まぬ御容體、如何なされました。」

森「たゞ驚くの外無き此場の有様、茫然と致してござりまする。」

武「手の中の玉も同じき最愛の彼を献ぜし其上にて、濟まぬ御顔を見ましては、何とも此方不足の申しやうが御座らぬ。いや、萬事を破除するは酒に如く無し、行末長く相滄らぬやう。」

僧「御仲直の御盃。其の立合には幸ひ控へたる佛蘭西座の同勢、早速此へ呼びまするのでござりませう。」

森「合點の参らぬ其の御言、佛蘭西座の同勢とは？」

武「聊か伯の武勳を頌せん爲の今夜の祝宴、御慰までに女優の

花を聚め置さまして御座る。」

森「すりや此の私の爲に？過分なる御款待のほど恐縮致してござりまする。」

武「只今見えまする其中に、當時絶世の國色と聞ゆる美人、之を御紹介致さんため、彼が呼びにまゐつてござりまする。」

森「然様なる婦人へは、此方よりこそ。」

武「いや、其には及びませぬ。」

森巢伯は窓に立ちて外面を眺め居たるに、僧に手を取らせ入來れるは阿鳥江なり。公爵は懇慫に挨拶して此方へと請せしが、此間森巢は始終氣着かて居たり。

武「まづ此方へお通りあれ。薩克斯伯には先程よりお待兼てご

ごります。」

阿「こりや貴方は酷う顔へてお在なるとは？」

阿「お可恥うはごりまするが、噂に高さ、薩克斯伯爵の御前と思ひますれば、心怯るゝやうにごりまする。」

武「薩克斯伯爵、鹿古嬢を御紹介致しまする。」

森「森は此言に振回り、阿鳥江を見て吃驚、

森「や、や!!!」

阿鳥江も絶叫せんとせしが、辛くも心を鎮めて、少時は茫然と顔を見合せたり。此時公爵は夜露を防がんと彼方に行

きて窓を鎖し、僧は阿鳥江の手袋帽子などを片付け居たり。

森「其方は何爲て此へ？」

阿「貴方が薩克斯伯爵とは！本に夢のやうな。」

と覺えず進寄る其手を把りて、

森「折悪し、静にく。」

阿「それでは貴方が、あの、薩克斯伯爵でござりましたか。」

旋て寄來れる公爵は阿鳥江の常ならぬ氣色に目を着け、

武「鹿古嬢には何と爲されたな。」

阿「お目通いたしまするは今が初度の薩克斯伯爵とばかり存じましたに、此の御方なればもう御相識もく古い御馴染でござりまするわいな。」

阿「然し、恚うお話を爲さるゝのは、定めて今夜が初度でござりませうが。」

阿「いえ、お話し申しますも、二度や三度ではござりませぬ。」

武「して又何處にて。」

阿鳥江の言はんとするを、

森「あ、いや、其の御話なれば私が致しませう。初て鹿古嬢にあ目に懸かりしは即ちオペラの舞踏會の折でござりました。」

武「あ、那の假裝舞踏會の節でござりまするか。」

阿「伯爵様にも假裝の御姿ゆゑ、誰方とも解りませぬ。」

森「こりや然様でござらうとも。」

阿「阿鳥江嬢より伯爵へ何ぞも頼の筋あるとの事でござりまする。」

森「此の私に？」

武「それゆゑ今宵わざと参られたる次第。」

森「それは何の様な事でござりまするか、早速伺ふでござりませう。」

阿「委細申上げたらはござりまするが、何も此では。」

森「憚ることはなしてはござりませぬか。」

阿「然やうなれば、其のお頼と申しますは、帽子と劔とをお持なさるゝ外には身一つの、世にも可憐なる陸軍士官の事でござりまするが、賤しき私風情が何の辨も無くも助け申さうと致したのが、今更にお恥ぢ存じまする。」

森「其様に有仰せられな。御心切の程、其の士官の身に取れて、

幾許嬉い事でござらうやら。」

阿「此上ともに其の士官の身分を糾し、眞實お願ひ申しますやうなる御方なれば、又改めてお頼み申上げまするてござりませう。」

武「食卓にて御席を並べ置さますれば、残の話は其にて寛々なさりませ。(僧に向ひ)支度は既に調ひ居るか。」

僧「花と果物とは愚僧の掛、些と檢分いたして参りまする。」
と僧は出行く。

武「うむ、それく、今の那の婦人を遁さぬやう。」

阿「私の事ではござりませぬか。私ならばなかく遁げも隠れも致しませぬわいな。」

武「遁げぬ者は可けれど、遁る者は遁さぬやう、口々を締めねば相成らぬ。」

と言棄て、此部屋を去る。森巢は公爵夫人の潜める室へ公爵の入りもや爲んと、心も心ならず。阿鳥江は額に手を置きて、

阿「どうも未だ疑が晴れませぬ。貴下が眞實薩克斯伯にて被在れまするか。常々お慕ひ申した薩克斯伯爵、それが猶且戀人の貴下とは。」

森「毛頭相違ござりませぬ。」

阿「あの、本當でござりまするか。道理こそ、士官風情に見るは稀なる御方と……虫が知らせたのでござりませうわい

な。
森「静にく。」

と制しつゝ、阿鳥江が一陸軍士官の己を思ふ情を感じ、又虎口に臨むが如く夫人の身の上を案じ居たり。

阿「御身の上を承り、此様な嬉しいことはござりませぬ。彼の莫斯科の御征伐にも、クツルランドの御戦にも、適れ雄々しき御功績。申すも畏き御方の御情受けし此身の冥加、それに引易へ、貴方には然ぞや御名の漬となり、又御武運の御妨と、勿躰ないやら、悲いやら、御赦しなされて下さりませ。」
森「はて、縁なればこそ慥く相成つたに、其の心配は無用にせられよ。」

阿「其の御言を聞く上は、此場て死ぬとも恨はござりませぬ。」
と手もて森巢の胸を指し、

阿「其の御胸にて私の胸は御判断なされて下さりませ。賤しき身なれど聊か辨もござりますれば、願ふは、此上ともに御國のため又御身のため、随分お勵みなされて下さりませ。足ぬは私ゆゑ其様な貴き御方とも存じませず、唯今始めて伺ひました嬉さの餘何も申上げられませぬ。どうぞ今迄同様に行末長う御不便掛けて、御國の事は猶更に御盡力あるやう、偏に願ひ上げまする。」

森「有緊は阿鳥江嬢、感服致した。何を謂ふにも日蔭の身、此後とても心添を頼入る。」

阿「今宵は折悪しうお目にも懸かりませず、皆様が薩克斯伯に會せてやらうと有仰ります故、貴下の御身の上をば頼み申さうと、推して参りましたる處、貴下が猶且其の御方とは。」

森「其の驚愕は此方とても同様。」

阿「御疑の無いは存じて居りますけれど、此身の潔白は神も知し召す、二世の契を結びしは天にも地にも貴下ばかりでござりまするぞを。」

森「此方とて其方の爲には粉に砕くとも惜まぬ此身。」

阿「其の御志、忘れば致しませぬ。」

森「誰ぞ参る様子、必ず氣取られぬやう。」

此時僧は花籠を持來り、續いて三曾根入來る。

僧「これく三曾根さん、氣毒ながら、此へ入られた上は滅多に出られは致ませぬぞ。」

三「然やうなことを有仰らずと、何卒ちよつと遣つて下さりませ。」

僧「愚僧は婦人方の花束を作る役目、其様な番は致しませぬ。」

お上が御自身に戸締を遊ばして、鍵をお持なされたれば、なか／＼出られはしませぬぞ。」

三「それは、まあ困つたことに成りましたな。明日の劇の事で急用が有るに因つて、恁しては居られぬのでござりますわいの。」

と三曾根は出行く。僧は後ろより、

僧「こらく三會根さん暫く待しやれ、待しやれと申すに、後追ひ駆け立去る。阿鳥江は見送つて森巢に向ひ、阿「して御名を御匿し遊ばして此家への御微行は。」

森「是には深き譯ある事にて、謂は、今宵に決する我身の浮沈。左にも右にも力を假らねば成らぬ其人は、子細有つて世を忍ぶ身の上なれば、密に此家に會見なせしを、鞫む事とて疑はれ、言解く術は有りながら、口外ならぬ一大事、切なき心中御察し下され。」

面上に誠を顯せども、阿鳥江は仍信じかねたる氣色にて、阿「して、あの雀羅嬢は？」

森「此には居られぬ。天地神明も照覽あるべし、其の對手と云

ふは、決して雀羅嬢では御座りませぬ、簡程まで申しても未だお疑ひなさるか。」

阿「何の御疑ひ申しませう。」
森巢は感謝の餘其手を握りて、

森「それ聞いて安心致しました。然し、此に(と聲を低め)難儀と云ふは、其の隠れ居る人を留め置いては、大事は忽ち露顯。番人を殺してなりと、此場の急を脱れずば相成らぬ。」

阿「然やうなれば、私が此に見張を致しませうほどに、好いやうになされまして、些も早う御身の難儀を。」

森「忝ない其の言。然らば萬事頼み申した。」
と飛ぶが如く彼方へ走行さぬ。

阿「神にも誓ひなされての今の御言、偽詐では得も有るまい。」
此時從々と三曾根が差寄りて、

三「其處にも在なされましたか。あの部屋の内のお人をば、貴方は御存知でござりますか。」

茫然と思案に沈みし阿鳥江は遠に心着きて、

阿「何でござんすえ。」

三「彼の隠れてお在なされるは、雀羅嬢ではござりませぬぞえ。」

阿鳥江は悦ばしき牀にて、

阿「伯爵様も然う有仰つてござんしたわいな。」

三「その御言に詐はござりませぬ。」

二人の話の話を聴きて、僧は差出で、

僧「何、雀羅嬢ではないと？」

三「お静になさりませ。大事の秘密でござりまするわいの。」

僧「それが何と致しませう。幸ひ四下に聞く者無ければ、其の様に包み隠さずとも可いてはござらぬか。」

三「私は申さずと、お解りに成りさうなものではござりませぬか。」

僧「雀羅嬢でないと言はるゝが、森巢伯御自身が雀羅じやと有仰つたからは、餘人であらう筈が御座らぬ。」

三「否々、然やうではござりませぬ。」

僧「それ程に言はるゝからは、此方は其人を御覧なされたか。」

三「見は致しませぬと……。」

阿「決して見ぬのが可うござんすわいな。」

三「見は致しませぬが、那の部屋の内に、白い着物が見えます。そして女子の氣勢が致しまするゆゑ、貴僧の御話なされました雀羅嬢と思込み、聲をば掛けましたところ、然てはなうて、變つた女子の聲音。頓と譯が辨りませぬ故、貴方は雀羅嬢ではござりませぬか、とお訊ね申しましたれば、成程雀羅の宅に違はないが、外の者でござりますと、此の様に有仰るからは、何でも人違でござりまする。」

僧「希有な事が有れば有るもの！」

三「まだく不思議なのは、貴方は誰方が存じませぬが、御助

けなされて此家を立退かして下されうなら、身に及ぶ限の御禮を致しまする。身代を作つても上げませう、又外に望が有るならば慥へても上げますと、まあ此様な事迄有仰ります故、金には望の無い私、佛蘭西座の座長ともち取立下さりませるなればと、簡様に返辭を致しました。」

僧「其先は……。」

三「其先は、此へまゐつた許でござりまするわいの。」

僧「然やうなら愚僧が見届け参りませう。」

と起行くを、阿鳥江は戸口に走り寄り、

阿「して貴方の御考は……。」

僧「先程此へまゐりし時、確に見たは雀羅嬢と伯爵、それには

證據もござりまする。」

阿「然やうなれば猶以て、其の方々の御迷惑なさらぬやう、知つても知らぬにして置いて、此場を濟すが世の情。餘人とは違ひ、人の難儀を拯ふが貴下の御務なりや、其様な由無い詮議はお思止まりなされませいな。」

僧「尤なる御言ではござれども、此詮議は是非とも愚僧が致さねばならぬ譯がござりまする。公爵夫人より莫大の御褒美を戴く約束にて、薩克斯伯の身の上に就き些と探偵致す事有れば、なか／＼此まゝには棄置かれませぬ。」

と其の部屋に入らんとすれば、

阿「否、如何なる事が御座りませうとも、お入りなされる事は

相成ませぬ。入つて可ければ薩克斯伯御自身にお入りなされるゝが道でござりませうぞいな。」

僧「成程。然らば薩克斯伯へ申上げ、其詮議を致せし上にて、雀羅の身に科無しとあらば、愚僧に於てもずんと満足。」

と憎さげに言ひて立去る。其の後影を見送りて、

阿「もう見えぬさうな。」

と四下に心を配るところへ三僧根は來りて、

三「其處に何してお在なされまする。」

阿「さあ、此部屋の内なは誰方か知らねど、急にお出し申さねば濟まぬ譯がござんすゆゑ。」

三「それでは私が御手傳を。」

阿「どうかお助け申したいもので御座んすな。」
三「然し、貴方は其様な事を作らぬが、こりや宜うはござりませぬか。」

阿「然しては私の念が達させぬゆゑ。」

三「何事も知らぬ顔でも在なざるゝが可さうにござりますぞえ。後て何の様な難儀が懸からうも知れませぬ。」

阿「難儀が懸からば懸かれ、一旦お助け申さうと思つたからは、飽くまで貫く私が意地。」

三「其様に有仰るものを、お止立て致しませぬ。然様なれば御手傳を致しませう。」

阿「巖伯爵様の御言には、誰にも姿を見せてはならぬとの事。」

私とても必ず御顔を見ぬやうに爲にやなりませぬ。」

と卓上の蠟燭を吹き消す。

三「あゝ、闇！此様な暗闇で、まあ仕事致されませうか。」

阿「静になさんせいな。人が参らば何かの妨碍、御苦勞ながら些と見張を頼み申しますぞえ。」

三「おつと承知を致しました。」

と表の方へと出行く。後に阿鳥江は隣室の戸口に立ちて、手を敲き、

阿「もうし〜。はて返辭の無いは……もうし、此をお啓けなさりませ。もうお啓けなされても氣遣はござりませぬ。」

此時戸は静に開きて、公爵夫人は窃と顔を出し、

夫人「お呼びなされたは？」

阿「早う此をお遁げなさいませ。私が好いやうに計らひますれば、些も早う。」

夫人「とは謂へ、戸口が締つて居りますれば。」

阿「其遁口は庭からお出なさるゝやう、此鍵をお持ちなされませ。」

と以前の鍵を渡す。

夫人「忝うござりまする。御蔭を以て危いところを助かります。然やうなれば何ぞ鍵をお貸しなされて下さりませ。」

と勝手に請取れば、

阿「さあ、誰にも見尤められぬやう、お氣をばお着けなさいませ。」

せ。したが、其庭口と云ふは何方でござりまするやら、私も一向不案内ゆゑ……。」

夫人「真に此暗闇にてお顔も解りませぬが、御恩の程は生々世世に忘れは置させぬ。何卒お名をお明しなされて下さりませ。」

阿「其の御訊には及びませぬ。人の参りませぬ内に早うお出なさいませ。」

夫人「お名は明さず、御姿は見えず……。」

阿「私とても、誰方様やら、其を知らうとも致しませぬ。」

夫人「其の御聲は何やら聞覺の有るやうな、もしや海松穂公爵夫人ではお在なされませぬか。」

阿鳥江「いえ、然やうな御方ではござりませぬ、唯御身に被る御難儀をお助け申すばかりの者。長居は危し、少しも早うお出なされませいな。」

夫人「其の難儀とは、何爲て御存知でござりまする。」

阿鳥江「設ひ存じて居りませうとも、其様な事を吹聴いたしまするやうな者ではござりませぬ。必ずお氣遣なされますな。」

夫人「さては其秘密をお話致した人がござりまするな。」

阿鳥江「何も彼も打明けまする御方が一人ござりまして。」

夫人は愕然として、

夫人「其を知るは天にも地にも森集様唯一人、はて、誰が貴方に其様な事を。」

阿鳥江「然や有仰れば誰が又、薩克斯伯たる御方を森集様など、馴々しうお呼びなされるので御座んする。」
と夫人の手を握りて、

阿鳥江「此の御躰の頭へる事わいの。うむ、すりや、貴方には森集様に……香やは隠るゝ白梅の、間にも著き戀衣。」

夫人「着つゝ馴れにし最愛の殿御。」

阿鳥江「吾身一人と思の外……。」

夫人「そんなら此方が詮議の當の敵でござりましたか。」

阿鳥江「然や有仰る貴方はなり？」

夫人「想ふに此方などよりは、負に貴き身分の者。」

阿鳥江「事も可笑や、其の證人には誰が成りまするぞいの。」

夫人「賤しき身をも顧みず、慮外な事言やるな。今に屹と思知らするぞや。」

阿鳥江「そりや筒様にまでしてお助け申しまするに。」
夫人「誰と必ず詮議せし其上は。」

阿鳥江「其の詮議なれば、此方でも屹度致さるや措させぬ。」
折から彼方に聲高く、

「事の由は残らず判然致せしぞ。」

聞くより夫人は慌忙しく駈出でんとするにぞ、

阿鳥江「もはや此上はお遁げなされるも益なき業。御覽なさらませ、あれ〜灯が見えまするわいな。」

夫人「既に覺悟を極めました。……とは謂ふものゝ手を束ね

て耻を曝すも口惜しや。」

と遽に一方の戸を排して走り出づ。他の戸口より公爵と僧とは松明を持ち、従者を率ゐて入来る。

阿誰方も早うお出なされませ。」

といひつゝ、振り回れば、はや夫人は遁去りたり。

阿「や、や。」

公爵は僧に向ひて、

武「確に雀羅でないと言はるゝな。」

僧「毛頭詐にござりませぬ。」

武「それにて安心致した。」

僧「先此室へ入らせられませう。」

と打連れて入りける迹に、阿鳥江を見て駈來る三曾根、
三「首尾好う今のお人をば？」

阿「助けて遣りましたわいな。」

三「薩克斯伯と手を引合うて出て行きました今の女、他でござりましたかいの。」

阿「そりや本當の事でござんすか。」

三「本當どころか、つい私と擦違に、遺して參つた證據の腕環。」

阿「其品私に預けて下さんせ。而して伯爵様は。」

三「其婦人と御一緒に。」

阿「こりや、もう望の綱は。」

と椅子に身を投懸けて、

阿「切れたわいな。」

此時隣室より出来る人々。

武公爵「何人とも知れざりしが、雀羅でないこそ先は大慶。どりや食堂へ參らうか。」

第四幕 武揚公爵家大廣間

奥の方に向ひて頻に會釋しつゝ武揚公爵家の大廣間に出来る三曾根、

三「どうぞ、もうどうぞ、それでは餘り恐入ります。然やうなれば是にて御免を頂戴いたしまする。」

と跡見送りて、

三「あゝ武揚公爵とも謂はれる御大身が、俺のやうな者をば那して慇懃に送つて下さると云ふのは、冥加に餘つて勿躰ない事ではあるわい。何はともあれ、肝心の用が足りて、是て重荷を卸したやうだ。どりや徐々出掛けやうか。」

と置時計を見て、

三「いや、もう三時か、すりや芝居の稽古も済んだ時分。一日たりとも休んだ事の無い此の俺が、今日ばかりは欠勤したのも、那の可愛い阿鳥江嬢の爲だ。」

館の僕は阿鳥江嬢を伴ひて入来る。

僕「三曾根さんは此にも出でござりました。」

三「あゝ、阿鳥江嬢。」

阿「三曾根さん、貴方は今頃まで何を爲て御座んした。私は二時間も前から待つてくゝ待ち明かして居ましたわいな。」

三「待つ身より待たるゝ身と云うて、私は一條に就いて大抵の心配を爲た事ぢやござりませぬ。」

阿「それはまあ御苦勞様でござんした。而して首尾は？」
 三「首尾は上々！早速公爵閣下にも目通を致し、此方の辯舌を以て巧く話の緒を引出し、あ上には阿鳥江嬢の指環さへ持參致しますれば、六萬法に御買取下さると、常に仰せらるゝやう伺及びましたるが、然やうにまで思召篤く被在るゝは、世にも難有き仕合、と先づ箇様に申上げたる所、言ふにや及ぶ！とあ上の御言。然やう御座りますれば是非に御慈悲を願はねば相成りませぬ大事がござりまするが、些と世間を憚る仔細もござりますれば、何卒隱密に御聽濟下されますやう、と慥う切込んだのでござりまするわい。」
 阿「其徑行は端折つて、どうぞ本文の處を早う聞かせて下さん

せ。」

三「すると、あ上には殊の外の御驚愕にて、彼の金剛石の指環を賣らうと云ふ阿鳥江嬢の心が解せぬと御意あるゆゑ、奈何御返辭を申上げて可いやら、當惑致しましたなれど、御使の口上は其限、私は何も存じませぬと申上げましたれば、御上には早速手形をお認めなされ、指環は暁と預り置く間、入用の節は何時たりとも取りに寄越せとのお言傳でござりました。」

阿「そして金子は？」

三「此に丁と持つて居りまする。」

阿「それで此胸が落着きました。今日中に無くてはならぬ其金

子、大抵氣を揉んだことではござんせぬわいな。」

三「此外にまだ二萬法御入用との事、此方は其金を持つてはござりませぬまいか、其も私が丁と心得て居りますぞえ。」
阿「えー！」

三「さあ、其の不足の分を調達して上げたいばかりに、態々取りに参つたので、それで此様に手間が取れたのでござりますわいの。」

阿「其程迄に此の阿鳥江を思うて下さる御志、私は決して忘れは致しませぬ。なれども、二萬法と云ふ金額を奈何して貴方が……。」

三「先日もち話申した叔父の遺産、餘所へ預けて置きました

故、それを取つて参つたでござりまする。」

阿「それは、まあ、貴方の身にも替へられぬ大事の金、何て私がお借り申して可いものでござんせう。」

三「これく、其様な水臭いことは言はぬもの。」

阿「否々、身の物を賣つてなりとも調へまする。人様の物をお借り申しては、どうも心が濟みませぬ。」

三「其様に御心配なされずと、萬望まあ取つてお置きなされて下さりませ。したか大枚の此金子、何に爲るゝち意でござります。」

阿「其ばかりはどうも申させぬわいな。」

三「成程、それなれば強てお訊ね申させぬが、折角の心盡の

此金子、お納めなされて下さりませ。」
阿「然様なればお言に甘え、後程拜借致しませうが、其六萬法は今から直にサントオノレエの大使館へお達けなされて下さんせ。」

三「那の莫斯科の大使の處でござりまするかえ。」

阿「其の莫斯科の大使館にてカルクルウツと有仰る瑞典の御方に金子を渡し、請取をお取りなされて下さんせ。」

三「えいと、瑞典の何と云ふ御方でござりましたな。」

阿「カルクルウツと申す伯爵でござんすがな。」

三「どうも其名が言難うてなりませぬ。」

阿「能う覺えて居て下さんせ。」

折しも僧は入來りぬ。

僧「こりや阿鳥江嬢には今時奈何して此にお在なされます。さては今夜御不參の御謝絶でも御座りまするか。」

阿「否々、お承を致しましたからは、屹度後程伺ひまする。」

僧「それはお上にも然ぞかし御満足。然し、今宵は鹿古嬢大御最負の御方が仔細有て御越無ければ、貴方に於ては、いやはや千萬御愁傷の事て御座る。」

阿「私をば大御最負の御方とは？」

僧「則ち彼の惘然なる薩克斯伯の事て御座りまするわい。」

阿鳥江は聞くより顔色蒼白めて、暫は僧を打戔れり。

僧「是はしたり、其様に氣味の悪いお顔を作れますな。薩克斯

伯には身の上の一大事が急に起つて、それはく目も當てられぬ今の境界、笑止なこととてざりまする。」

三「何と有仰ります。」

僧「さあ、此様な珍談を手に入れて、御並に吹聴するのが愚僧の役目、根から葉から丁と探索が達いて居ります。御存知でも御座りませうが、此秋にはクルウサンド征伐として出陣する筈、其勝敗に因りては、大公爵は愚の事、王位にも登らんず企のところ、手配は漸く調ひながら、降つて湧いたる俄の災難、之に何程豪氣の薩克斯伯でも敵ふこととはござりませぬ。」

三「其様な事が有るものでは御座りませぬわいな。」

僧は嗤笑ひ、

僧「現在七萬法の負債が有つて、首の廻らぬ伯爵閣下。」

聞いて愕くは三會根なり。

阿「すりや、あの七萬法の負債ゆゑ。」

僧「されば、其の負債が仇となり、露西亞大使の手に捕はれ、獄屋に推籠の身となられたとやら。」

三「それは眞實の事とござりまするか。」

僧「眞實にもく、其手形を所持するはカルクルツと云へる伯爵……。」

三「そんなら、あの瑞典人の？」

僧「何爲て其を？」

三曾根は面色變へて阿鳥江に向ひ、

三「さてもく、貴方はな……！」

僧「其の瑞典人と云ふは、男と思ひの外女にて、然も伯爵が嬖
じやとの噂でござりますわい。」

阿「何、女でござりまするといな。」

僧「其處どこは愚僧も嘘とは突止めませねど嫉妬深い女ゆゑ、
圖らず這度の大事を惹起したとやら。有繁の大將軍も今頃は
獄屋の内にて然ぞや窮命致し居らるゝ事でござらう。どりや
是よりお上へもお話申し、此事件の落着をばトひ見るも又一
興。」

と立去る僧の姿を見送りて、三曾根は阿鳥江の側に寄り、

何をか言出でんとしたりけるが、阿鳥江は石の如く凝然と
して思案に沈み居たり。

三「今の話は奈何でも眞實でござりませうか、貴方は那の薩克
斯伯が其の様にも最愛うござりまするか。」

阿「さうな。」

三「猶且、あの、助けてお遣りなさるゝお意でござりまするか
いの。」

阿「知れた事でござんすわいな。」

三「貴方の身上を打込んでも、惜うは無いのでござりまする
か。」

阿「設ひ此身を捧ぐるとも、更々惜うはござんせぬわいな。」

三「其様な誠をお盡しなされても唯今聞けば伯爵には餘所に女があるとやら、それでも貴方は何ともござりませぬかいの。」

阿「其の女の有る事も疾から知つて居るのでござんす。」

三「知つてお在なざるなら、那樣薄情男に此方ばかりが誠を盡すは無駄な事。」

阿「はて、戀の慾といふ者は、吾心でありながら吾が思ふやうには成らぬが常。賢も不肖も推並べて誰しも迷ふ理外の理。」

三「成程な！」

阿「一旦慥と思込んだ上からは、人は何のやうに言はうとも、私の戀は私の物、貫く處まで貫かすには措きませぬわいな。」

三「而して貴方はまあ何爲さらうと云ふ御覺悟でござりまする。」

阿「何の慥のはござんせぬ、お救ひ申さにやならぬ御難儀、共々力を添へて下さんせ。したが今の話では、外に女子があるとやら。」

三「其女こそ確に腕環の持主でござりませうが、伯爵様の方から焦れてお出なさるゝに違はござりませぬ。」

阿「どうも然かも知れませぬが、萬望もう其様な事を言うて下さんすな。胸に刃を刺されるやうな想がして、聞く度毎に私は命が短りますわいな。」

三「成程、こりや悪い事を申しました。」

阿「どうぞして探つて見たい其女も、今に此度知れるでござんせう。思へば私の力にて、既の事世の中へ御顔も出されぬところをば、左にも右にも助かりながら……。」

三「して貴方は薩克斯伯様をば何爲されます。」

阿「此私をお騙しなされた薩克斯伯、戀しいとも幽しいとも思ふ心は微塵もござんせぬ。」

三「こりや然らうなうてはなりません。其の又戀の覺めた人に、貴方は何故身上までも打込みなさるゝのでござります。」
阿「それも戀の遺恨を晴さうばかり、今戦にお勝なさるれば、萬乗の御位にも登りなさるゝは知れた事、其の大切な御身の難儀をお救ひ申せば、設ひ森巢様はお忘れなさらうと

も、御身に着いたる譽や位が此の阿鳥江を忘るゝ事は出来ませぬわいな。さあ、憊言ふ中も心が急ぐ、早う行つて御身の難儀をお救ひ申して下さんせ。宅へ歸つて待ちます程に、此度様子を知らせて下さるやう、私が一生のお願でござんす。」

と出行く後に、三曾根は手に持ちし帽子を被りて、

三「あ、あ、無理はない！阿鳥江嬢の心根が俺はもう不便でならぬわい。」

と四下を胸し、

三「とは言へ、馬鹿々々しい！好いた男に心中立の金なら、惜しくもないは道理じやが、何じやい、仇讐の那の森巢に、大切な指環まで賣轉して了ふとは氣の知れぬ。然し、まあ、此

方の大事の阿鳥江嬢の依頼とあれば、此儘にも棄置かれま
す。」

と咄く折しも公爵夫人入来る。三會根は迥に影を望みて、

三「ても艶麗な！是や大方奥方様であらうわい。」

と近づきて挨拶するを、夫人は氣着かて居たり。

三「うむ、こりや私の挨拶がも目には入らぬか、入らぬこそ此
方の幸。どれ、露西亞の大使館へ一走り行つて來ませう
わい。」

と倉皇彼方へ走行く。

夫「森巢様と那の女優との間は知らねども、妾との其間は、今
となつてはなかくに斷るに斷られぬ縁の糸、ほんに嬉しい

事ではあるわい。が、氣遣なは、殿より下されし那の腕環、
何處へ奈何して何時の間に落したやら、尋ぬるにも尋ねられ
ぬ身の後暗さ。拾うた者が有つたなら、品に記章は無けれど
も、直に名の出る事であらうが、はて、奈何ぞしたいものじ
やなあ。其もあれば是も有り、森巢様が身の上を一から十ま
てお明しなさるゝ其の女と云ふは、まあ何者であらうぞいな。
思へば那時暗黒の顔も見知らぬ邂逅、誰と詮議の違も無う、
むざ／＼別れし口惜さ。」

僧入来る。

夫「これはお出なされませ。」

僧「毎もく麗しき御姿哉。今日は又曠の宴會とて格別の御

粧、一入忍僧の目を驚かしてござりまする。「
夫、又しても其様な事言はぬものでござりまする。而して那のお頼み申したお話は、今に御返辭ござりませぬが、何とか様子をお聞かせ下さりますせ。」

眞「されば、其の御返辭を申上げぬゆゑ、定めて酷い御腹立とは存じますれど、目下探索最中にて、容易に知れざる彼の秘密。」

夫「ぞりや、もうお骨も折れませうが、何と云うても貴方の腕前、頼に致して居りまするわいな。」

眞「其の仰無くとも、早く御褒美に有着かんと、大抵骨を折つた事ではござりませぬ。未だ暎とは解りませぬど、雀羅と申

す事だけは漸く探索致してござりまする。」

夫「なに、あの、雀羅が？」

眞「いかにも。御上にも其御見込でござりまする。」

夫「否々、雀羅でないは私が請合ひまする。つい此程不思議な

場所にて、其女に出會ひましたなれど、黒白も知れぬ闇の中、

然も而も枝葉の繁き森中ゆゑ、解らう筈は無けれども、必ず

雀羅ではござりませぬ。」

眞「すりや、奥方様には其者にお會ひなされたと仰せられまするか。」

夫「されば、姿は見えぬど、互に言を交すうち、優しき聲にて、貴女の秘密は何も彼も話す人あつて能う存じ居りますと、此

様に申しましたが、どうも聞覚ある聲音ゆゑ、今に不思議な
なりませぬわいな。」

僧「さて、不思議な事があれば有るもの。」

夫「其場所は些と申難うござりまするが、確に海松穂夫人と存
じましたゆゑ、今朝お訪ね申してよく、お聲を聞きますれ
ば、可恐しい甲高にて、鼓膜が破れさうにござりました。其
歸途に二人三人心當の方を訪ねましたなれど、間に聞いたる
其聲とは似ても似着かず、頓と様子が知れませぬ。」

僧「阿綱夫人にお逢ひなされましたか。」

夫「否々。して、そりや又何故でござります。」

僧「愚僧の鑑定には、何やら阿綱夫人が怪しうござりまする。」

夫「成程、然う聞けば昨日の那の態、薩克斯伯に意が有りさう
な。が、那の方は夙て外に憧る、殿御があるとの噂。」

僧「それこそ阿綱夫人の甥御でござりませう。」

と噂し合ふ處に僕來りて阿綱夫人の入來を告ぐるにぞ、夫
人は僧と顔見合せ、

夫「丁度好いところへ。早速様子を探つて見やうではござりま
せぬか。」

僧「愚僧もお側にて何彼と氣を着くるでござりませう。」

此内阿綱夫人入來る。公爵夫人は席を起ちて、

夫「ようこそお越なされましたな。今も今とて貴方のお噂。」

阿「二三日前より今日のみ樂に待暮して居りました。」

僧は公爵夫人の袖を引きて、聲を低め、

僧「あのお聲は、如何でござりまするな。」

夫人は小首を傾けしが、單一言にては判じ難ければ、暫く

待てと目色に知らずれば僧は更に阿綱夫人に向ひ、

僧「阿綱夫人には、今宵彼の阿鳥江嬢に何ぞ御所望でもござりまするか。」

阿「ある段ではござりませぬ。何を云うても今佛蘭西に一人の阿鳥江嬢、何を爲せても外の俳優の真似らるゝ事ではござりませぬわいな。」

僧「然らば那の雀羅の技倆を如何思召しまする。」

公爵夫人は、怒る簡短なる問答にては、其聲調を確め難し

と思へば、

夫「それく、私も此頃は貴方の有仰る通り、酷う阿鳥江が所好になりました。那の臺詞廻の好さと申しては、ほんに心詞も及びませぬ。次の週には野藍公爵のお邸にて、素人演劇のお催あるを幸ひ、私も出来ぬながら阿鳥江の假色にて何ぞ致して見やうかと、實は心懸けて居りまする。」

阿「それは又好いと思着。是非貴方の舞臺顔は拜見致したう存じまする。」

夫「こりあ言痛入りまして御坐ります。想うたより難しいは有繫其道にて、只今も些と稽古致して居りましたのでござります。」

阿「それは折角も樂みの所をばお妨致しました。どうぞ、まあ、御遠慮なく御稽古を遊ばして下さりませ。」

夫「有難うござりまする。申す迄もござりませぬが、藝は自分の意任にならぬもの、恁の那のと工夫を凝しますれば凝す程聞苦しうなるばかり、滅多に好い調子は出ぬものにて、獨り躁めて居るので御座りまする。」

夫「取別難しい文句と申しまするは、臺詞の中に『貴方の秘密は、話す人ありて、残らず私が存じて居りまする。』と、まあ是が何も思ふやうに參らぬので御座りまする。」

阿「其が其の様にも難しいとは?!」
夫「さあ、難しいか易しいか、致して見ませぬうちは解りませ

ぬ。貴方は何の様に爲されまするか些とも願ひ申しまする。

阿「私には企及も無い事で御座りまする。」

と起去らんとすれば、公爵夫人は僧に向ひて小聲に、

夫「那のお困りなされたお顔色わいの。」

侯「さては那方と極つてござりますわい。」

此時來賓の各夫人は打連れ立ち、紳士も數多、武揚公爵に續きて入來る。

武「先程より御議論盛なりし彼の件は、私の申す處に毛頭相違はござりませぬ。全く自由の身と相成つてござりまする。」

と群客と語合ひつゝ、席に着けば、
阿「そりや誰方の事でござりまする。」

武「彼の薩克斯伯の事でござりまするて。」

夫「すりや、那の森集様が？」

客の一人なる侯爵夫人は隊を容れ、

侯「伯が捕はれたとは、今朝から世上一般の取沙汰でござりました
したが、さては嘘と相見えませぬ。」

武「いかにも、然様でござりまする。」

阿「捕はれの御身と聞く間も無う、御自由の御躰とは、何やら
物語にありさうな。それには何ぞ面白い経緯が？」

侯「有る段では御座りませぬ。伯の負債を残らず償うた人がご
ざりますとやら。」

夫「ひえッ！誰が又其を償うたのでござりまする。」

侯「さあ、誰でござりませうか、武揚公が御存知の筈。」

武「其負債を償うたるは、恁申す私。」

皆々「貴下が!!!」

武「いかにも償ひましたれば、大方それにて赦さるゝ事と存
じ、今の様に申したのでござりまする。」

侯「其事實の真相は、追着恐僧が探りませう。よもや助かる道
はあるまいと存じますれば。」

侯「否々、薩克斯伯と入魂の方より承りましたれば聊か疑
はござりませぬ。」

武「私とても、伯を獄屋へ推籠めたる當人、即ち瑞典の債主を
煽動せしフロウレスタンより直々に聴取りましたれば、虚説

とも思はれませぬ。」

爵「そんなら、あの、フロウレンスタンが露西亞大使へ訴へに及び……。」

武「いかにも彼が所爲の由。」

阿「でも紳士には有るまじき卑劣の振舞。」

武「それ故、伯は憊と知るより決闘を申入れたとの事でございます。」

夫「何、決闘でござりますと……！ それでは今夜は御列席の程も如何ござりませうやら。」

阿「其儀は御安心なされませ。屹度も越なされませうて御座りまする。」

公爵夫人は嫉妬の一念看々面に現れて、

夫「それを貴方は能うまあ御存知でござりまするな。」

僕は來りて阿鳥江及び三會根の參着を告ぐ。人々は一齊に

席を起ちて、皆阿鳥江の入來る方に進み出づ。侯爵夫人は

後の方にて、某男爵夫人に向ひ、

侯「今夜のお催には、何か悲劇が一幕出るとやらでござりまする。」

男「そして、喜劇もござりますとやら。」

公「武揚公には殊の外喜劇をお好きなされませとの事。」

男「奥方とても喜劇は劣らぬ御所好でござりまする。」

彼方にては、武揚公爵阿鳥江の手を取りて、

武「これは好うこそ御出席下された。我等夫婦とも満足至極に思ひまする。」

阿綱夫人は公爵夫人に向ひ、

阿「どうぞ私をば御紹介なされて下さりませ。日常慕ひに慕ふ鹿古嬢、素顔でお目に懸かるは今が初度、早うお相識になりたうござりまする。」

公爵夫人は阿綱夫人を始として多くの夫人を一々阿鳥江に紹介するを、三會根は悄然として後に控へ居たり。

阿「箇様な曠のお席へ御招き下さるさへあるに、各位様のお手厚さ御待遇、冥加に餘つてお禮の申さう様もござりませぬ。」
と言ふ聲音を聞きて、公爵夫人は一方ならず打驚き、我に

もめらて絶叫したりしが、阿鳥江は氣も着かず、

阿「未熟の身にござりますれば、各位様へお目通を幸ひ、足はぬところは幾重にも御指圖下されうなら、有難う存じまする。」

公爵夫人は愈よ驚き、此聲こそ確に暗中の女に極れりと、獨り心に領き居たり。阿鳥江は猶も慇懃に、

阿「此後とても各位様のお引立をば偏にも願ひ申しまする。」

公爵夫人は此に到りて、幾ど夢かとはかり疑ひつゝ、物をも言はて憫れぬたり。恚とも知らず、阿鳥江は犇々と寄集ふ貴婦人に圍れて、絶えず談話に忙しかり。

夫「さては賤しき女優づれに御心移りし事なるか。思へば無念

や！」

と阿鳥江を睨めるたりしが、忽ち氣を取直して、公爵の側に行き、

夫「大方皆様も揃ひなされましたれば、もはやお始めなされては如何でござりまする。」

阿鳥江は此時三會根と何事をか呷るたり。公爵は夫人に向ひ、

武「薩克斯伯にも列席あるべき筈なれば、今暫く待つと致さう。」

夫「否々、伯には御越はござりますまい。」

武「とは又何故。既に自由の身と相成られし上は、列席あるに

相違無し。」

夫人は陰かに阿鳥江の態に目を放さず、

夫「薩克斯伯には此へも出あるとの貴方の言でござりましたが、伯は決闘にて深手を負せられましたぞ。」

言も出でず打驚ける阿鳥江を尻目に掛けて、
夫「那の坊様のお話ゆる虚偽はござりませぬ。」

僧は夫人が意外の言を聞きて、
僧「是は爲たり、其様な儀は愚僧は申せし覺會て……。」

と言はんとするを夫人は目もて推止めつ。此方は戀人が不慮の災難と聞きて、轟く胸を抑へんとすれば、可憎心搔亂れ、面は忽ち蒼白めて暫悶ゆると見る間もなく、其處に絶

入りて伏轉びぬ。夫人は冷かに打見遣りて、
夫「こりや阿鳥江嬢には何ぞ爲されたさうな。」

三會根は馳寄りて、

三「や、こりや、まあ何爲れました。これく阿鳥江嬢、お
氣を確にも持ちなされませいのう。」

人々の立騒ぐ間に阿鳥江は漸く甦りて、

阿「各位様へ鹿相千萬、御免なされて下さりませ。此の噴々し
き御席と云ひ、又餘りも座敷の暖さに、つい取逆上せまして
ござりまする。萬望もうも管ひなされて下さりませすな。」

公爵夫人の與ふる薬を阿鳥江は推戴さ、

阿「これは、まあち手づから恐多い。」

と言ひつゝ顔見合せ、

阿「ても可恐し、那の眼色！」

と眩く折から、薩克斯伯參着との報に、満座目を聳て、

其の入来るを迎ふる中に、阿鳥江は心勇みて、思はずも入
来る伯の手に縫らんとするを、衝と出てたる三會根に遮ら
れて、二人は目と目を見合するのみ。公爵は僧を顧みて、

武何を云ふやら、一つとして實の事は言はぬ御坊、深手のお

怪我と舌の根も乾かぬに、慙く眼前の御列席。」

僧「是は近頃迷惑に存じます。恐僧に於ては然様な事をば申
せし覺は無いのでござりまする。」

藤園を怯るゝは瑞典人の習てござりますれば。」

武「誠に仰の如く。」

森「未だ鋒を交へざるに、劍を捨て、降參致してござりまする。」

と更に公爵夫人に近きて聲低く、

森「危い處を助りましたるも、偏に御高配の致す處千萬忝なう存じまする。」

夫「何の、其の御禮よりは先づお愛てたら存じまする。」

森「直に彼地へと存じましたれど、一方ならぬ御盡力のお禮を申さん爲、此迄參つたる次第にござりまする。」

阿鳥江は傍目も轉ず二人の様子を伺ひ居たり。

夫「して私に何を御用が御座りまするか。」

森「是非も話致さねばならぬ事もござれば。」

夫「然やうなれば今宵會の終りし後。」

森「窃に御意得る事で御座らう。」

此にて森は阿鳥江の傍に行かんとするを、公爵は寄來りて、

武「彼の瑞典の件に就いて伺ひたい事もござれば、他なる別室まで御越下さるべし。」

と二人は相率ゐて隣室に入りぬ。貴婦人等は物珍しげに阿鳥江の傍に湊ひて雑話の興に入れば、僧と公爵夫人とは此方に在りて、

僧「奥方には、いやもう途方も無い事を被仰れましたな。」

夫「ほし、常から貴僧の有仰る事には一つも實はござりませぬゆゑ、それで那のやうな事を申ししたが、悪うござりまするか。(と來賓に向ひ)皆様、何と然やうではござりませぬか。而して誰様もお聞き下さりませ、此坊さまは昨日から何やら探索するとして、脚を棒にして飛行して在のてござりまするが、それは、あの、薩克斯伯が戀を爲さるゝ美人が有るとやらにて、あゝ、それく、阿鳥江嬢には御存知の筈でござりましたな。」

阿「あの、私が？」

夫「人の噂には、其の戀人は劇場内のお方とやら申す事てござりませぬぞえ。」

阿「ふむ、それは又耳新しいお話、私の承りましたは、薩克斯伯様の戀人と云ふは、最も位高き貴婦人と申す事てござりまする。」

僧「阿網夫人の方を見遣りて、

僧「愚僧の鑑定も其通り。」

夫「私の聞きましたには、或夜其の戀人に會うた人が有るとやら。」

阿「私とても其通り、某處の別荘には現に其の貴婦人に出會うた者が有ると聞きました。」

阿網「こりや面白さうな御話、悉い様子をお聞かせなされては下さりませぬか。」

夫其の女優と云ふは世にも稀なる嫉妬深き女にて、目の前に伯の噂を爲るゝ時は、氣を採抜いて直に悶絶するとやら申しまする。」

阿「然う承りますれば、私にも申す事がござりまする。其の貴婦人は道ならぬ首尾の最中、思掛なう夫に陥込まれ猫に追れし鼠のやうに、命辛々闇黒をお遁なされたとの事でござりまする。」

阿綱「でも悉い事をば孰劣らず御存知でござりまするな。」

僧「成程、こりや双方とも然う有りさうな事でござりまするわさ。」

阿綱「然りながらお二方とも其の様に有仰るには、何ぞ確な證

據ても。」

夫其女より伯爵に贈りし花束を、仔細有つて手に入れて居りまする。」

阿鳥江は悸とせる躰。阿綱夫人は彼に向ひて、

阿綱「貴方のお手にも何ぞ證據が御座りまするか。」

阿「其の貴婦人がお遁げなさるゝ折、取落されし證據の一品。

阿綱「そりや上靴と云ふやうな品でござりまするか。」

阿「否々、金剛石入の見事なる腕環でござりまする。」

聞くより公爵夫人は血相變へて、はたと阿鳥江を睨みたり。

僧「何かアラピアンナイト様の物語ではござりませぬか。」

阿「其様な根無事ではござりませぬ。其腕環は人手より渡つて

今は私が所持いたして居りまする。」

と腕環を出す、僧は取擧げて人々に示しつゝ、

僧「誰方も御覧なされませ。何と偉しい腕環ではござりませぬか。」

公爵夫人は纒に瞥見して、

夫「美事な物でござりまするなあ。」

此時公爵は薩克斯伯諸共出來りて、二夫人の間に座を占む

れば、公爵夫人は席を去り、阿綱夫人は連に件の腕環を賞讃す。

武「何を其様にも讃めなされまする。」

僧「此なる腕環でござりまする。」

武「身が奥の腕環をば？」

何等なき公爵が言に一同驚きて、

昔「あの、是が奥方様のでござりするか！」

猶も氣着かぬ公爵は、腕環を取擧げて、如何にも悦しむ。

武「何と、好い腕環でござりませうがな。」

此に始て阿鳥江は其の落し主の公爵夫人なるを證し得つ。

旋て貴婦人等の皆彼方へ去りし後、阿鳥江は何をか三會根

に叫び居たり。公爵夫人は此時公爵より件の腕環を請取り

て己が手に着け、

夫「さ、阿鳥江嬢、伯爵も御出の上は、何ぞお始めなされて

下さりませ。」

阿「あの、私に何ぞ爲よと有仰りまするか。」

三曾根は低聲にて、

三「これ、これ、も些と氣を鎮めてからにしたが可うござりまする。未だ皆様も揃ひなさらぬ事なれば、急ぐ事はござりませぬ。」

森巢は此躰を見て、

森「阿鳥江嬢、我々一同の所望てござる。」

阿鳥江は屹となりて、

阿「難有さ其の御所望、必ず忘れは致しませぬ。」

夫「皆様もお席へも着き下りませ。薩克斯伯には私の側へ。」

此様を看たる阿鳥江が胸は忽ち惱亂して、幾ど席にも得堪

ふまじく、如何は爲んと惘然たり。

武「さて、何を演じ下さるな。」

阿綱「那のポリイヌの述懐が宜らてはござりませぬか。」

侯「エルミオンは如何てござりまする。」

男「カミイルが可さうにござりまするが、又彼の世に捨てられたア、リヤンの述懐も面白うござりませう。」

此一言に、喪心の躰なりし阿鳥江は屹と目を聳て、如何にも痛苦に忍びざる氣色なりき。

阿綱「何彼と申さうより、昨日も演じなされたフェドルが宜うござりませうわいな。」

阿「然やうなればフェドルをば。」

と方も脱けて最慵げに阿鳥江は場の中央に立ちて、フェエドルの一節を朗讀す。

抑もフェエドルと云ふはラシイヌが傑作の悲劇にして、今彼の口演せるは、女主人公フェエドルが其情人の負心を憤りて、言々句々に痛恨の血を嘔く條なれば、恰も好し、彼の心事は是の心事、其の愬ふる所は直に此の愬ふる所となりて、或は自ら怒り、或は自ら悲み、悽愴淋漓として聲調の外に迸りぬ。然るに公爵夫人は却つて平然として、森葉伯に寄添ひ、いと睦しげに呷きては、嘲むが如き眼色にて屢は此方を眺むるに、泳へかねたる阿鳥江は氣も狂しう、遂に指もて夫人に擬し、フェエドルの辭を藉りて彌よ急に責め置れば、聴衆は身毛も

彌立つ思して、嘆賞の聲暫く鳴を止めざりけり。程無く朗讀闕れば、滿場一齊に喝采して、

甲「どうも有難う存じました。」

乙「天下無類と申します。」

丙「いやもう悚然と致しました。」

三會根は阿鳥江の袂を引きて、

三「もし、今のは、ありや何と云ふ事でござりまする。」

阿鳥江は唯打疲れて、

阿「これ少は怨も晴れましたわいな。」

夫「黙つて見て居れば、今の無禮！屹度覺えて居やれ。」

と聞えよがしに言放てり、阿鳥江は公爵に向ひ、

阿「甚だ疲勞致せし上、氣分も悪うござりますれば、勝手がましうは御座りませう、今宵は是にて御暇を願ひます。」
 と立去らんとすれば、薩克斯伯は慌て、其方に行かんとするを、

尖「まあ、暫く此にお在なされませいな。」

公爵は阿鳥江に對して、

武「強つてお引留は致さぬが、今暫く可いではござらぬか。然やうなれば是非も無い、……こりやく阿鳥江嬢が馬車の支度を申付けい。」

公爵夫人は客なる某の夫人と語を交ふる間に、森巢は辛くも其處を脱れて、阿鳥江の側に來れり。

阿「さ、私と一緒にい出なされませいな。」
 森「今宵は奈何も任意にも成りかねれば。」
 阿「それ了然お心も解りましたわいな。」
 と言捨て、阿鳥江は出行さぬ。